

二三本の横線が引いてあつた。そして又、それについての質問が終りに記されてゐた。日に何回となく、僕は蜂巢に似たこの果てしのない廊下を、ウラデーミル・イリツチの室へと通つた。當時は軍事上の問題が對談の中心であつた。外交政務ぐわいかうせいむに就いては、僕は全くマルキン君とサルキンド君とに委せてゐた。僕は宣傳用の覺書を書き上げること、二三の人に會ふことだけに止めてゐた。

ドイツの攻撃と云ふことは、最も難澁なんじふな問題であつた。それには我々はどうしても解決の方法がなかつた。そして又この方法をどうすれば見出せるか、どうすればその方法を案出することが出来るかと云ふことについても、全然者がつかなくつた。僕の書いた「社會主義者の祖國は危し」(The Socialist fatherland is in danger)と云ふ草稿さうかうは、左翼社會革命黨側の論難攻撃に會つた。國際社會主義への新加盟團として、世に訴へんとするこの文章の題名が、この黨を驚かしたのであつた。しかるに一方レニンは全く之に賛成してかう云つた。「そのまゝ、それは我々の戰爭中止から祖國そこくの防禦への百八十度の轉回を示してゐる。我々の要望えうぼうしてゐるところは、正しくそれだ。」その草稿の最後の要點の一つに、敵に援助

を與へるものは何人でも、即刻處刑すると云ふ問題があつた。左翼社會革命黨のスタインベルベ、この人はどうした風の吹き廻しか、革命の中に捲き込まれ、人民委員會までに列する様になつた人だ。この人がそれは「控訴のやさしみ」を破壊するものとして、この嚴格げふか脅威手段しゆだんに反對した。

「反つてその中に」とレニンは叫んだ。「眞の革命のやさしみ(彼は皮肉にこの言葉のアクセントを逆にした)があるのだ。最も嚴格な革命のテロリズムがなくして、我々が勝利者になり得ると、君は思ふのか？」

その頃が、レニンがあらゆる機會を失することなく、テロリズムの絶對必要を強説した時期であつた。感傷さ、緩漫さ、微温なまぬるさ等のあらゆる現れは——これ等は凡べて濃厚のうこうではなかつたが、當時至るところに瀰漫してゐた——それ等自體の本質を、そしてそれ等自體のために、彼は決して腹を立てることはなかつたが、それが労働者階級の幹部連が、時局の未曾有みんきよくの難局と、そしてそれに劣らざる未曾有の精力を以つてななければ、その難局を解決することが出来ないことを充分痛感しないための現れであつた時に、彼は初めて怒つ

たのであつた。

「彼等は」とレニンは敵に就いて云つた。「凡べてのものを失はうとする危機に瀕してゐるのだ。そしてその上彼等は戦争の辛酸をなめて來た。何萬人と云ふ人を脊負ひ込んでゐる。例へば、何物かに取りかゝらうとねらつてゐる士官、旗手、ブルジョア、地主の嗣子警官、有福な農民、これ等が等しく既に現狀に飽き、決意するところがあらうとしてゐる。それなのに愛と慈悲とを以て、革命を完成しなければならぬと考へてゐる『革命黨員』——と云ふのは少し變だが、とにかく革命黨員があるんだ。さうかね？ 彼等は學校へ行つて何を教はつて來たか？ 彼等は獨裁制をどう云ふ風に考へてゐるのか？ 少しでも弱音を吐いたりしてゐる内に、獨裁制はどうなつて了ふと思つてゐるのか？」

我々は一日に十度もかう云ふ激越な演説を彼から聽かされた。そして、そこにゐる人々の内で、「平和主義」に未練のある人に向つて、當てつけるのが常であつた。彼等がレニンの面前で革命と獨裁制とに就いて語る時には、殊にそれが人民委員會か、左翼社會革命黨又は半信半疑の共產主義者のゐる所で、かう云ふことが起つた際に、彼は常に次の様に論

ずるのを忘れなかつた。「どこに果して我々は獨裁制をもつてゐるか？ 諸君がもしそれがあつたと云ふなら、それを僕に示して見給へ。我々のもつてゐるものは混亂である。しかしながら決して獨裁制ではない」

この「混亂」と云ふ言葉は、彼の非常に好きな言葉であつた。「我々がサボターヂを事とするものと、白衛兵とを、射殺する覺悟がないならば、それは一體何と云ふ大革命なのだ。ブルジョアの犬が、我々に就いて、新聞に書いてゐるところを見給へ。こゝには獨裁制がどこにあるか？ 冗談と混亂とより外に何物もないぢやないか……」これ等の演説は彼の實際の感じを物語つてゐた。しかし同時にそれは、それ以外の目的をもつてゐた。それはこの方法によつてレニンが、唯特に強烈な方法だけが革命を救ふことが出來ると云ふ意識を、多くの頭の中に打ち込んだのであつた。

新國家を構成する分子の弱みは、ドイツが攻撃を始めた時に、最も明かに現はれた。「昨日はまだ我々は鞍の上に跨つてゐた」レニンは、僕と二人きりの時にかう云つた。「そして今日は我々は唯鬣をしつかともつてゐるだけである。それが、又一つの教訓だ。そして

此の教訓は、我々の呪ふべき怠慢の上に、ある効果をもたずには置かないだらう。秩序を作つてから實際にもものにとりかゝると云ふことは、もし我々が奴隷となることを願はないならば、我々のなさねばならぬことなのだ。それはもしも……もしも唯ドイツ人が白軍と提携して我々をたゞき倒すことに成功しなくとも、それは一つの非常にいゝ教訓になるだらう」

「君！」とウラデーミル・イリツチは、全くだし抜けに僕に話しかけた。「もし白衛軍が君と僕とを殺す時には、ブハーリンはスウエルドロフと妥協するだらうか？」

「殺される様なことは、あるまいぢやないか」僕は笑ひながら答へた。

「どうだかね」とレニンは云つて一人で笑ひ出した。その會話は、それだけで杜切れた。

スモルニーの部屋の一つで、當時幹部は會議を開いてゐた。それは凡べての會合の中で最も不規律なものであつた。誰がそれを取極めたか、誰がそれを司會するか、何を特に協議するのか、誰もそれを知らなかつた。こゝで先づ初めに、大體の形で軍事専門家の問題が提出された。我々はこの方面には既にクラスノウとの戦闘で幾分經驗をもつてゐた。そ

の戦闘の時に我々は聯隊長ムラウイエフを司令官に任じ、そして彼は自分の下に聯隊長ワルデンをブルコフに對する作戦の指揮に任命したのであつた。四人の水兵と一人の兵士とはムラウイエフを監視し、そして彼等の短銃を手から放すなど云ふ命令を受けて、彼の所に派遣された。それが監督委員制度の起源であつた。この經驗はある程度迄は、最高軍事評議會の設立の基礎ともなつた。

「づう／＼しい悪ずれのした軍人は、容赦なくやつ／＼けなけりや、我々はこの渾沌たる状態から脱することは出来まい」僕は軍事部に來る度に、ウラデーミル・イリツチに話した。

「それは確かにさうだ。けれどもあれ等はきつと裏切りの手を用ゐるだらうよ」

「我々は銘々に、一人の監督委員をつけて置かなければいけない」

「一層二人つけて置く方がいゝ」レニンは叫んだ。「そして強い人間がいゝ。しかしそれは出来ない相談だよ。強い共産主義者がゐないんだから」

これが、最高軍事評議會設立のもとであつた。

政府をモスコーに移す問題は、少なからぬ議論を惹起した。それはかつて十月革命の基礎を据付けたところのペテログラードの遺棄である様に思はれた。労働者は必ずそれを了解しないに違ひない。スモルニーはサヴェイエート権力の象徴になつてゐる。そして今彼等はそれを捨て去らうと企てゝゐる、と云ふ様な色々の抗議が現はれた。

レニンは文字通り狂はん許りの勢で、これ等の抗議に答へた。「君達は、そんな感傷的な間拔けさで、革命の將來の問題をどこまでも解決出来ると思つてゐるのか？ もしもドイツが一躍して、ピーターズブルグを、我々諸共に占領して了へば、それで革命はお終ひなのだ。もし又反對に政府がモスコーにあれば、ピーターズブルグが陥落しても、それは重大でないことはないが、畢竟一部分の打撃ですむ譯だ。君達がそれ位のことが見えない解らないと云ふことがあるものか！ それのみならず、今日の状態で我々がピーターズブルグに留まつてゐるとすれば、軍事上の危険を増すことになる。同時にドイツにピーターズブルグを占領しようと云ふ誘惑を、感じさせる様になるのだ。こゝに居を構へることが、革命と平和の運命を決定するものでない限りは、こんな飢ゑやせた革命都市にがん張つて

ゐたところで、何の役に立つものか？ スモルニーを革命の象徴だなどと云ふ間拔けな云ひ草が、何になるか？ スモルニーは我々がそこに居たからこそ、スモルニーなんだ。そして我々がクレムリンに住む様になれば、凡べて彼等の象徴や表示はクレムリンに移つて行くに相違ないのだ」

終に反對黨は説きふせられた。そして政府はモスコーに移された。僕はピーターズブルグ革命委員会の議長として、暫くの間ピーターズブルグに残つてゐたと思ふ。僕がモスコーにつくと、クレムリンで所謂騎士の翼と云はれる所で、ウラデイーミル・イリツチに會見した。「混乱」——それは無秩序と渾沌状態とを意味するが——はこゝではスモルニーと少しも變りはなかつた。ウラデイーミル・イリツチは、人を押しつけて自分を先きにとあせつてゐたロシア人を優しく叱責した。そして一步一步しつかりと手綱を引締めて行つた。

政府はその各部については、寧ろたび／＼更新したが、法令に就ての仕事に一時夢中になつて手をつけ出した。人民委員の評議員の會議と云ふ會議は、先づ初めは立法をその場

で即席に書き下ろして行く特號大の繪であると云つてもよかつた。凡べては初めから始めなければならなかつた。根本こんぽんから絞り出さねばならなかつた。我々は「先例せんれい」をもち出すことは出来なかつた。なせならば我々の歴史は、そんなものを全く持つてゐなかつたからである。單純な要求などできへ、時の不足のために中々簡單かんたんには行かなかつた。革命的に根掘り葉掘り討究して行く間に、各種の問題が飛び出して來た。云ひかへれば何が何だか判らない様な混亂に陥つた。大と小とは、滅茶苦茶にもつれ合つた。左程重要でない實際問題から、最も大きな内容をもつ理論の問題が生れて來た。法令は凡べてが、決して凡べてが調和を保つてゐはしなかつた。そしてレニンはよく大びらに我々の作り出した法令の不調和を、冷やかしたものであつた。然し終にはこれ等の矛盾むじゆんは、假令その當時の實際の仕事から見て怪しげなものであらうとも、立法りつぽふの手段によつて人間關係の新世界への新しい道を摘示した革命的な考へ方の進むにつれて、消え失せて了つたのである。

この全體の仕事の指導しだうは、レニンに負はされてゐたことをこゝに忘れずに云つておきたい。彼は倦む氣もなく、五六時間も續けざまに人民委員會の議長となつた——しかも初め

の頃はこの會議は毎日催された——そして演説者の時間を時計で細心に割あてながら、議案から議案へと進行を促して行つた。これは後になつてから議長用のタイムメーター（又はセカンドメーターと云ふ）で計ることになつた。

一般に問題は、何の前觸まへぶれもなしにもち出された。そして前にも云つた様に決して時間を延すことは許されなかつた。時によれば討論の始まる前まで、委員は勿論議長までもその問題の内容が知られてないことが、非常に度々であつた。しかも討論たうろんは常に簡單に切り上げねばならず、提案理由の説明にも、僅か五分か十分だけしか許されてゐなかつた。それにもかゝはらず、議長はその會議を正しい方向に導いた。もしもその會議に人がよく集つて、そして特に關與者くわんよしやの中に、専門家が見知らぬ人が出席してゐる場合には、レニンは彼のいつも好んでやる仕草をした。と云ふのは彼は右手を額に楯の様に當て、その指の間から提案者、特に出席者を視つめるのであつた。かうして「指の間から見つめる」と云ふ言葉のもつ意味とは反對に、彼は非常に鋭く注意深く凝視ぎやうしする。細い紙片の上に小さな字で（つましいやり口だが）演説者の姓名が列記されてゐた。片方の眼でテーブルの上

に示されてゐる時間を、その度毎に見つめるのは、もう時間だと云ふことを演説者に感付かせるためであつた。同時にこの議長はとつさの間に、討論中特に重要と彼の思はれた結論の要綱書を、決議の形にして書き上げた。その上大抵の場合、レニンは時間を節約するために、その出席者に短かい覺書を渡した。そしてそれによつてある種の報告を求めようとした。これ等の要綱はサヴェート立法の手法の精髓を表はした處の、非常に浩瀚で同時に非常に興味ある書翰文體の貴重な文獻となつたに相違なかつたが、遺憾ながらその大部分は、破り捨てられて今は残つてゐない——と云ふ譯は、その裏に回答が書かれてあつたので議長が念入りにそれを破り捨てたからである。一定の時間になると、レニンはその決議を一段と聲を張つて読み上げた。その調子はいつも故意に角張つて、先生が生徒に教へる様な調子であつた——と云ふのは意味を強めて重要なものと云ふ觀念を印せしめ、そして全く修正を許さないと云ふ威を示すためであつた。それがすむと討論は終結したことになるが、さもなくば實際的の動議と追加條文とに、具體的に審議を進めて行くこととなる。この様にしてレニンの「要旨」が夫々の法令の根柢となつたのである。この仕事をや

りおほすためには必要な才能が多々あつたが、その中でも強い創造的の想像力が特に必要であつた。この言葉は一見すると矛盾の様に思はれるが、よく深く考へて見るならば正しく物の核心を掴んでゐる言葉である。人間の想像力には色々な種類がある筈である。物の建設にたづさはる技術家は、縦横に構想を走らす小説家と同様に、この想像力を必要とする。この想像力の最も貴重な種類の一つは、人や物や現象を、假令人がそれを見たことがない場合でも、現實そのまゝに描き出すところの才能である。人生の全經驗と人間の理論上の蘊蓄とを、動いて行くところを掴まへた一つ一つの小さな断面に適合し、結合すること、それを次第に働かして行くこと、それを融合して行くこと、そして類推の公式的法則に従つて完成して行くこと、そして又それによつて人生の一定の相面をその全實形の中に明かにして行くこと、それ等が立法家や行政家や革命時の指導者に、かくべからざる想像力となるのである。レニンの強みは、彼の現實的な想像力の強さにある。そしてそれは又非常に重要な強みとなつてゐる。

レニンは常に目標をしつかりと把握して迷はなかつた——又さうでなければ、レニンの

レニンのところは無い譯である。レニンは次の様な考へを先づ初めて、「イスクラ」の中に發表したと僕は覺えてゐる。政治活動の複雑な鎖の中に、人はその時の時局に就いて中心となる環を探し出さなければならぬ。そしてそれをつかまへて全體の鎖の方向を定めなければならぬ。と云ふ意見を發表した。後になつて又レニンが、この考へ方に戻つて行つたことは度々であつた。しかもその時でさへ、鎖と環との同じその比喩を用ゐてゐた。この方法は意識の圈内けいなんちから云はゞ、彼の無意識の境涯に這入つて行つて、終には彼の第二の天性になつて了つた。特に危急な際に時局の非常に重大な、きほどの政略上の變化の問題が起つた場合には、レニンは延ばすことの出来る左ほど重要でない他のものを、悉く捨てて顧みなかつた。これは彼が中心問題をその主要な點だけを掴みとつて、細部を無視したと云ふ意味に決して解釋かいしゃくしてはならない。それどころか、それとは全く反對である。彼は延ばすことが出来ないと思へた問題を、凡べてその實際の姿にして、彼の眼の前に置く。そしてあらゆる方面からそれを把握する。細部を研究する時には、屢その二次的な細部までも研究する。そして更にあらためてそれに當り、それに意義を興へるために取り掛りの

點を探求する——彼は考へ返し解釋し強説し證明し、そして主張した。しかし乍ら凡べてはその時局にとつて彼が決定的のものと思ふ所の一つの「鎖の環」に従屬してゐた。彼が捨て去るものは唯に中心問題と直接問題に相背馳あひはいちする凡べてのもの許りでなく、彼の注意を散らし努力を弱める様なものをも、又捨てたのであつた。特に危急な場合には、彼は彼の全興味を引くところの問題と關係のない様な凡べてのものに對しては、聾であり同時に盲めくらであつた。他の問題、云はゞ關係があつてない様な問題を、理由もなくもち出して來ると云ふことは、彼はそれを危険きけんなものと思へて直覺的にそれから彼は身を引いたのであつた。

一つの危機をうまく乗り越して了つた時に、レニンは何かの理由で往々叫ぶことがよくある。「然し、我々はこれこれすることを全く忘れて了つた……我々は主要な問題に全く氣をとられてゐる間に、間違をして了つた……」彼等は屢々それに答へた。「しかしこの問題はもち出されたし、この提議は正しく提出されたのだ。唯貴下がその時、それには少しも耳を藉かさなかつたんだらう」

「さうだ、その通りだ」彼はいつも答へるのであつた。「私はちつとも覺えてゐない」
 そして彼はするさうに、そして幾分知つてゐる様な風に笑つた。そして彼特有な、上か
 ら下へと手を動かす特別な身振をしたが、それは、人は同時に凡べてのものを決定するこ
 とは出来ない、と云ふことを語るものゝ様に思はれた。この「缺點」が凡べて彼の力を最
 も盛んに、内面的ないめんてきに働かせ出す彼の才能の裏の一面なのである。そして彼を歴史上最も偉
 大な革命家に造り上げたのは、正しくこの才能であつた。

一九一八年に書かれた平和條約に關するレニンの論文の中で、彼は云つてゐる。「ロシア
 で社會主義を成就させるためには、ある時日、少なくとも數ヶ月は必要である」

さてこれ等は如何にも腑に落ちない言葉の様に思はれる。それは考へ違ひではないだら
 うか？ 何年とか何十年とかの積りではなかつたのか？ ところが事實それは決して考へ
 違ひではない。恐らく誰でも探さうとすれば、それと同じ意味の、他の澤山のレニンの陳
 述を見出すことが出来るであらう。僕は今でもよく覺えてゐるが、スモルニーの人民委員
 會議で、初めの頃イリツチは半年以内に社會主義は政權せいけんを得て、我々は世界での最も大き

い國家になるのであらう、と云ふことを繰り返して云つた。その時合黙しかねて顔を上げ
 驚いて互に顔を見合せて、しかし何とも云はずに黙してゐたものは、唯左翼革命黨員許り
 ではなかつた。これが彼が人を諄々と説き伏せようとする遣り口であつた。それから後は
 レニンは、彼等社會主義的施設の實現に關する凡べての問題を「最後の決勝點」を目安に
 せず、唯今日と明日とを目安にして考へさせる様に凡べての人を訓練くんれんすることを願つて
 ゐた。

この様に彼の態度が急轉回きふてんくわいを現はすと同時に、彼は彼特有の、物の極端を誇張して説く
 と云ふ方法を、早くも氣付いてゐた。昨日は、社會主義が最後の目的であると我々は云つ
 た。しかし今日での問題は、社會主義の支配權しはいけんは數ヶ月の内に確保されるであらう、と云
 ふ様に考へ話し、且つ行動することである。それは唯先生が子供を教へる方法だけ位の價
 値しかないと云ふかも知れないが、決してそれだけのことではない。先生が子供を教へる
 努力の外に、まだその上に何物かなくてはならぬ。それは何であるか？ レニンの強烈
 な理想主義と熱烈ねつれつなる意志の力が、それなのだ。そしてそれは二つの時期の急轉回の際

して、進行の一時の頓挫を少なくし、定まつた目的に近く引寄せたものである。彼は彼の云ふところのものを、正しいと信じてゐた。そして社會主義の發達のために専ら想像に耽つた半年間の休止状態は、今日の凡べての仕事を現實主義的に彼が把握すること、同じ程度に、レニンの精神の働をよく表してゐる。人間の進歩についての強い可能性、そのためには、人は犠牲と苦難との幾干かの代價を、喜んで拂ひ、又拂はねばならぬ。その人間の進歩に就いての可能性に對する深い固い確信が、常にレニンの精神的機構の大原動力であつた。

甚しい難局の中で、最もいやな日々の仕事の中で、委員としての面倒さの中で、そしてブルジョア戦争でとり圍まれたありとあらゆる困難の中で、レニンはサヴィエートの構成に非常に意を注いだ。そして又細心の注意を以て國家の構成分子の小さな實際上の要求を農民の國に於けるプロレタリア獨裁の原理の問題と調和させた。

憲法委員會は、何の理由であつたか、ともかくもレニンの「生産者の権利の宣言」

(Declaration of the Rights of Producers) を書き直すことを決議した。そしてそれを憲法の原

文と「一致」させた。僕が戦線からモスコーに歸つて來た時に、委員會から受け取つた材料の中に、この修正された「宣言の概要書」さう云ふのがよくなければ、少なくとも、その宣言の一部があつた。僕はその事については、レニンの事務室で、初めて知つたのであつた。その事務室に居合せたのは、唯レニンとスウェルドロフだけであつた。その時にはサヴィエート委員會に對する準備の仕事をしてゐた。

「ところで、宣言書を修正しなければならぬと云ふのは、どう云ふ譯かね？」僕はスウェルドロフに詰つた。スウェルドロフは憲法委員會の議長であつた。

ウラデーミル・イリツチは興味を以て顔を上げた。

「そのことだが、この『宣言』の中に、憲法との矛盾、それに不正確な公式があるのを、委員會が丁度見付けたのだよ」ヤコブ・ミハイロウイツチが答へた。

「僕は、それは無意味だと思ふね」と僕はそれに應酬した。「既にその宣言書は認められてゐるし、そして歴史的の文獻にもなつてゐる——それを修正すると云ふのは、どうも意味が判らないね」

「それはほんとにさうだ」ウラデーミル・イリツチは口を出した。「彼等は、この問題を全く不必要にこね廻してゐると僕も思ふ。若者は顔も剃らず、髪も梳らず、そのまゝに生かして置くのがいゝんだ。思ふまゝにさせて置くがいゝんだ。それだからと云つて、矢張り彼は革命の兒であるには違ひない……もし君達が彼を床屋に遣るとしても、彼は少しも立派になりはすまいよ」

スウエルドロフは「忠實に」彼の委員會の決議を辯護したが、間もなく彼は我々に同意した。僕はその時に氣付いたことだが、ウラデーミル・イリツチは、憲法委員會の提議に一再ならず反對しなければならぬと思つたのだが、自分がその著者である「生産者の権利の宣言」の修正に對して、明かに争をもち上げたくはなかつたのであつた。しかし乍ら、今第三者が味方として飛び出して來て、思ひがけなくも最後の瞬間にそれを引覆してくれたのには、彼は一方ならず喜んでゐた。そこで我々三人は「宣言」を修正しないことに決意した。かくて立派な若者は床屋に行かないですんだのであつた。

サヴィエート立法の進化の道程を研究して、革命それ自身の進行とその中の階級關係と

に關聯して、立法の主な動因と轉廻點とを明かにすることは、極めて重要な仕事である。なせならば、その研究の結果は、他國のプロレタリアに對して實際的に最も重要なものでもあり得ると共に、又重要なものでなければならぬからである。

サヴィエートの法令集は、ある意味に於て、ウラデーミル・イリツチ・レニンの全集の中で、決して輕んじることの出来ない一部分を占めるものである。

Ⅶ 反革命軍との鬭争

一九一八年の前半期は、我々にとつて難局であつた。あらゆるものが喰ひ違ひ、大切な時に折れて了ふ。摺むべき頼りは何物もなく身を支ふべき何物もない、と考へさせられた程の時が度々あつた。一方から考へれば、十月革命がなかつたならば、この國は遙か以前に腐つて了つたに相違ないことは極めて明白であつた。又他方にこの疲弊し亂れ切つた絶望の國の生命の力は、新政體が確立するまで存續するだらうかどうかと云ふ問題を、一九一八年の春に、人々は無意識に質問したものであつた。糧食は手元にはなかつた、軍隊も

なかつた。國家の構成分子はまだ組み立てられてゐなかつた。陰謀は到るところに腫物の様にふくれ上つてゐた。チエツク・スロヴァクの軍隊は獨立勢力として、我々の領土に張り出した。我々は彼等に殆んど何の反抗をも示すことも出来なかつた。

一九一八年の特に難局なんきよくに面してゐた時であつたが、ウラデイーミル・イリツチはある時僕に云つた。「今日労働者の代議員の一團が僕の所に來た（遺憾ながらそれが何のために來たか、僕は記憶してゐない）そして僕の言葉をとつて彼等の一人が云ふのだ。『レニン君、あなたも亦資本家の味方になつたと、人は見てゐます』ねえ、君！ 僕がさう云ふ言葉を聞いたのは、それが初めてだよ。白狀するが僕は心が顛倒てんたうして了つて、何と答へていゝか判らなかつた。それが悪意のものでなく、メンシエヴィキ式のものでないとすれば、それは何か不吉な兆候てうこうだ」

レニンがこの挿話を語つた時には、彼はその後には戦線からカザンの陥落かんらく、それに引續いて忽ちピーターズブルグが脅かされると云ふ暗い知らせが來た時よりも、遙かに大きな困惑と驚愕とを見せてゐた。そしてそれは又當然のことなのだ、カザンでも亦假令ピーター

ズブルグでも、我々は之を失つても奪ひ返すことが出来る、しかし労働者の信用と云ふものは、黨の根本の大黒柱である。

「僕はかう云ふ氣がするが」と、その時僕はウラデイーミル・イリツチに云つた。「この國は恐ろしく重い病氣をして來た後だから、尙生命をつないで丈夫になるために、今は前よりもいゝ榮養えいようと休養と注意とを必要としてゐる。今のロシアは指の先で衝ついてもすぐ引くりかへる有様なんだ」

「僕もそれと同じ氣がする」とウラデイーミル・イリツチが答へた「血液の恐るべき缺乏！ 今この上ちよつとでもつゝかれゝば、その度毎たびごとにあぶないんだ」

しかし乍ら、歴史はチエツク・スラヴァツクスをして、この危険なる攻撃を興へさせる様に脅かした。チエツク・スラヴァツクの軍隊は、何等の反抗なしに南東ロシアと云ふ病弱の身體を突き刺した、そして社會革命黨とその他まだ白色のとれない英雄連と提携ていけいしたボルシエヴィキは至るところで既に勢力を得てはゐたけれども、地方の方では尙その組織は非常に未熟なものであつた。それは既に周知の事實であつた。實際のところ十月革命

は、唯ペテログラードとモスコーとだけに遂行されたのであつて、大多數の地方の都市では、十月も二月も何れの革命も電信で遂行されたに過ぎないが、これ等の革命は、來てそしてそのまゝ行つて了つた。それは首府でさへも既にさう云ふ風の状態を踏んだのを見ても明かなことである。昨日の支配者に對して何等反抗の氣のなかつたとりとめのない社會状態は、結果として又革命に對しても頼みになるものではなかつた。チエツク・スラヴァツクスの侵入は、初めは我々にとつて時局を一層惡變したが、終には我々に都合よく轉廻した。白軍はその時既に軍事上の結晶點に達して形體をなしてゐたが、赤衛軍の實際上の革命的結晶は、それに應じて初めて始まりかけた處であつた。ウオルガの地方だけは、チエツク・スラヴァツクスの眼の前で、十月革命を完成したと云ふことが出来る。しかしそれは一時に起つたのではなかつた。七月三日にウラデーミル・イリツチは僕を軍事委員會に招いた。

「君は知つてゐるかね？ 事件を」彼は詰つたやうな聲で尋ねた。その聲で彼が何か興奮してゐることが直ぐ知れた。

「いゝえ、一體何……？」

「左翼社會革命黨員がミルバツハに爆彈を投げた。報知によると彼は重傷であるさうだ。クレムリンに來ないか、よく話し合はう」

それから二三分間した頃に、僕はレニンの事務室にゐた。彼は僕にあらましの状態を話した。そしてしつきりなしに電話をかけて新しい詳報を尋ねてゐた。

「面白い話だ、實に」と僕は云つた。そして尋常のことゝは云へないこの報知を考へた。

「どうも此の頃は單調で困つてゐた所だから……」

「えゝ？」レニンは當惑さうに笑つた。「それはブルジョアの持前のひどいやり過ぎだ——彼は皮肉に「やり過ぎ」と云ふ言葉を使つた。「エンゲルスが『亂心狂氣の小ブルジョア』と云つた状態が丁度それだ」

再びせはしい電話の應答、外務部から、全ロシアの臨時委員會から、そしてその他の部局からの聞合せと返事とに忙がしかつた。レニンの精神は危急の際の常である様に、同時に二つの方面に働いた。マルキストとして彼は彼の歴史的の經驗に富んでゐた。そして此

の新しい事件、此のブルジョア急進主義の「やり過ぎ」を興味深く評價した。しかるにそれと同時に革命の指導者として、彼は倦むことなく報告の糸を張つて、實際手段を指圖した。その時に全ロシア臨時委員會の軍隊の間に反抗が起つたと云ふ通知が齎らされた。

「左翼社會革命黨はきつと舗石の上の櫻ン坊の種子になるね。その内にその上に乗つて我が引くり返るんだ」

「僕の考へてゐるのもその通りだ」レニンは答へた。「心の定まらないブルジョアジーの運命がまさしくその點に懸つてゐる。彼等は櫻ン坊の種子の役をして白衛軍の助けになる：今はどんなことをしても我々は、ドイツのベルリンへの報告の調子を何とかうまく書かせる様になければならない。武力干渉への口實は、これで全く立派に出来上つた。特にミルバツハが、我々は弱い一撃を加へらるればそれまでだ……と、絶えず報告してゐたのを考へて見れば」すると、そこへスヴェルドロフが這入つて來た。彼の氣色はいつもと變りはなかつた。

「かうなつては」と僕に笑ひながら會釋して彼は云つた。「かうなつては、我々は又人民委

員會を革命委員會に變へなければならぬまい」

レニンは暫くの間、後へ後へと來る報告を受けてゐた。ミルバツハが死んだと云ふ知らせが來たのは此の時だつたか後だつたか、僕は今記憶してゐない。我々は「悔やみ」を云ひに大使館に行かねばならなかつた。レニンとスヴェルドロフとそれにチチエリンと思ふが、この三人が行くことに決まつた。僕も亦行くべきかどうかといふ問題があつたが、取急いで意見を交換した結果、僕はゆかないですんだ。

「向へ行つたら、何と我々は云つたらいゝかな」頭を振り乍らウラデイーミル・イリツチは云つた。「僕はもうその事にはラデツクと話し合つたんだ。僕は『ミットライト』(同情する)と云ひたい所なんだが、『バイライド』(悔やむ)と云はずばなるまい」

(註——原著通りに獨逸語をそのまま用ゐて置く)

彼は僅かに笑つて、上衣を着、そしてきつとなつてスヴェルドロフに、「さあ、行かう」と云つた時に、彼の顔は變つた。そして石の様な灰色になつた。ホーヘンツォルレン大使館まで車を驅つてミルバツハ伯の死に悔やみを云ふことは、イリツチにとつて容易な業で

はなかつた。精神上的の経験として、恐らくそれは彼の一生の中での最も苦しい時の一つであつたらう。

かう云ふ時に當つて人は人を知る事を學ぶ、スウエルドロフには、誠に人の及ばないところがあつた——信ずるところ厚く、大膽であつて機敏、そして毅然たるところはボルシエヰイキの最も優れた型であつた。これ等の苦しい幾日かの間にレニンは、屢々ウラディミル・イリツチはスウエルドロフを招致してあれこれと緊急手段をもち出したが、大體の場合「もうとづくに！」と云ふ返答でうけ流された——と云ふのはその方法は、とづくにもう考へてゐると云ふ意味であつた。我々は屢々それを戲談にして云つた。「またきつとスウエルドロフが『もうとづくに！』と云ふだらう」

「でね、初めは我々は彼が中央委員會に這入ることに反對したが」とある時レニンは僕に云つた。「それから見ると我々が人間を判断するのは随分出鱗目なものだね！ それに就いて一通りの議論があつたが、大會では我々は下の方から直された。そして、それがほんちに正しかつたことが判つた」

左翼社會革命黨側のその行動のために、我々は政治上の同志と提携者とを失つた。しかし結果に於ては、それは我々を弱めずに反つて我々を強めた。我々の黨は前よりも一層堅く結束した。多くの組合や軍隊では共產主義の團體がふえて來た。政府の政策は益々しつかりして來た。

これにはチエツク・スラヴァツクスの行動も亦疑なく與つて力があつた。と云ふのはブレスト・クトウスク以來我々の黨を沈みきつてゐた悲觀狀態からそれが奮起させたからである。東部戦線に向つて部隊の動員の時期が初まつた。ウラディミル・イリツチと僕は、未だに左翼社會革命黨員がそれに屬してゐた第一團を解散した。既にこの時、稍不鮮明ではあつたが、將來の「政治上の分裂」の兆が認められた。とかくする内にヴォルガから報告が來た。しかしそれは一層よくない知らせであつた。ムラヴェエフの裏切りと左翼社會革命黨員の行動が、その當時東部戦線に新しい混亂を惹起させた。危険は急に一層烈しくなつてきた。しかしこの時に急激な變化が起つたのであつた。

「我々は悉くの人と物とを動員して、戦線に送らなけりやならない」とレニンが云つた。

「『ヴェール』の後部から戦闘能力のある凡べての部隊を引抜いて、ウオルガに向はせなければならぬ」

この「ヴェール」と稱したのは、西部のドイツ占領地帯せんりやうちたいに對抗してゐた部隊の薄い哨兵線のことであると、僕は記憶してゐる。

「そしてドイツはどうする？」彼等はレニンに詰つた。

「ドイツは動くまい。彼等は他にすることがある。そして彼等は我々がチエツク・スラヴアックスを片付けなければならぬ破目はめになつてゐることに、興味を以て見てゐるのだ」

この計畫は採用された。そしてそれが將來の第五軍の生れる素であつた。そして僕のヴォルガへの旅立ちが又決定された。僕は列車を組立てるのに忙殺ぼうさつされた。實際それは、その時には容易なことではなかつた。ウラダイーミル・イリツチはあらゆることを喜んで承諾してくれた。そして簡單かんたんな思付きを僕に書いて寄こしたり、しつかりなしに電話をかけて來たりした。

「君は大きな自動車をもつてゐるかね？ クレムリンの格納庫から、一つをもつて行つたら」

そして半時間も経つと亦「飛行機をもつて行つたかね？ 君はあらゆる場合にそれを使はなくつちやいけない」

「軍隊に何臺も飛行機はある」と僕は答へた。「必要な場合にはそれを使う」

そして又半時間も経つと「いや僕の云ふのは、君が列車に、飛行機をつけて行かなければならないと云ふんだよ。何が起るか判らないから」かう云ふ様なことを續々と云つて寄こした。

色々な人種からなつた搗きませの聯隊と師團とは、主として昔の軍隊の訓練のない兵士から成つてゐた。彼等がチエツク・スラヴァックスとの最初の戦闘せんとうで潰走して了つたことは、如何にもなさけないことであつた。

「かう云ふ恐るべき抵抗ていかうりよく力の缺如に打ち勝つためには、我々は絶對的に共産主義者の強い我無しやらな師團、殊に戦争に適した人間が必要だ」と僕は東部戦線に立つ前にレニンに

云つた。「我々は彼等に無理にも戦ふ様に強いなければならない。もし我々が農民が本氣になるのを待つてゐるとすれば、恐らく時期を失して了ふだらう」

「無論、それは確だ」と彼は答へた。「僕の心配してゐることは、我むしやらな師團でも矢張り望み通りのしつかりした所を見せはしなからうと云ふことだ。ロシア人は氣がやさしい。それで革命の威嚇的いかてきな斷乎たる手段は、ロシア人の氣には向かない。しかし何と云つたつて我々はさうしなければならぬのだ」

レニンを襲撃したこと、ウリツキーを暗殺あんまつしたことのニュースが、スキヤシユクにゐた僕の所に届いた。この様な唯さへ血の汗の出るやうな時期に、革命は又内部的の事件にも苦まねばならなかつた。こゝに至つては革命の「やさしみ」も捨てなければならなくなつた。黨と云ふ鋼は愈々最後の焼きを入れることになつた。峻嚴しゅんげん、そして尙必要な時には無慈悲と云ふものまでが、それから生れて來た。戦線に於ては政治的分裂が、若い軍隊の權力を發展はつてんせしめるための、がむしやらな軍隊と軍法會議ともつれ合つて、鬭争をしてゐた。

忽ちに局面の轉回して來たことが明かになつた。我々はカザンやシムビルスクを奪還し

た。カザンで僕はヴォルガの最初の勝利の急報をレニンから受け取つた。その時には既にレニンは襲撃の痛手いたでから回復してゐた。

すぐその後で、僕がモスコーに着いた時に、僕はスウェルドロフと一所にウラデーミル・イリツチに會ひに行つた。彼は急速に回復はしたが、まだ仕事をしにモスコーに歸る迄にはなつてゐなかつた。我々が會つて見ると彼は非常な元氣であつた。彼が直ぐさま尋ねたのは、軍隊の組織そしき、その士氣、共產主義者の任務、規律きりつの増進などであつた。そして彼はうれしさうに繰り返した。「さうか、それはいい。それは素的だ。軍隊の鞏固こうこになつたことは、全國中に響いて忽ち規律と責任との強化きやうくわに役立つことになるだらう……」

秋になつて眞の大革命が起つた。春の間見せてゐた血の氣のない弱さは、最早跡形あとがたもなくなつた。何物かゞそれに代り、次第に強さを増して行つた。そして革命を救つたものはこの時は氣息抜きに一休みしようと云ふ氣持ではなく、反つてプロレタリアの中に深く潜在してゐた革命的エネルギーの波を追ひ立てたところの、一つの新しい際どい危機であつたことは特筆とくひつすべきことである。

スヴェルドロフと僕とが自動車に乗つた時に、レニンは平靜に時々とバルコニーの上に立つてゐた。彼がこの時の様な平靜の姿を見たことを僕が覚えてゐるのは、十月二十五日、彼がスモルニーで旗上げの最初の軍事上の結果に耳を傾けてゐる時だけである。

我々は左翼社會革命黨を政治的に片附けて了つた。ヴォルガは一掃された。レニンの負傷は全快した。そして革命は人々の中に強く刻まれた。

三部 人間レニン

I レニンとウエルズの會見

レニンに捧げられた多くの本の一つに、僕は英國の著作家ウエルズの書いた「クレムリンの空想家」(The Visionary of the Kremlin)と題する一文を發見した。そこには編輯者の注意書きがついてゐる。それは「ウエルズのやうな斯程までの人でさへ、ロシアに起つてゐるプロレタリア革命を理解しなかつた」といふのである。だが單にこれだけの理由で、ウエルズの論文を、この革命の指導者に捧げられた本の中に入れこんだのではない。と云ふ事は誰でも考へるところに違ひない。然し乍ら、そんなことはどうでもいゝことだ。僕は——少くとも僕だけは——ウエルズの論文のある部分を相當興味を以て讀んだのだ。しかしそれには次に説明するところで明かな様に、著者ウエルズ自身は確かに何の氣もなしに書いたのであつた。

僕はウエルズがモスコーに來訪した時のことを眼の前に、髣髴することが出来る。その時は丁度、一九二〇年から二一年にかけての寒い飢饉の冬であつた。春と共に襲つて來る

に違ひない窮迫の不吉な兆が絶えず漂つてゐた。飢ゑたるモスココーは雲の中に深く埋もれてゐた。この時に當つて我々の政策は、正に急激な轉廻をしようとしてゐた。時は丁度さういふ危急の際であつた。僕はウラデー・ミル・イリツチがウエルズとの對話の揚句、如何にもあきれ返つて茫然自失してゐた有様を、今でも極めてよく記憶してゐる。

「何んてブルジョア的な男だらう！ あれは敵だ！」と彼が繰り返した。そして兩手をテーブルの上に載せて笑つて嘯いた。それは彼が他人に向つて一種のさげすみを感じた時に、いつもやる彼の癖であつた。

「あゝ！ 何んといふ敵だ」彼はまた話をしだした。我々の雑談は政務部の會議の開會前に交はされたのであつたが、それがこの短い繰り返して云はれたウエルズの人物批評で主にうづめられてゐた。然しその短い言葉は全部を表はすに充分であつた。僕は告白する。僕は殆んどウエルズのものを読んでゐない。そして又彼に會つたこともない。にも拘らず、この英國のお座敷社會主義者、フェビアンフェビアンのそして空想的なユートピア式な題目を取扱ふ美文家、この人が今自身共產主義者の實驗を見るためにこゝへ旅だつて來たのだ。そ

の光景を僕はあり／＼と手にとるやうに想像できた。それにレニンの感慨無量の言葉、特に彼の調子それだけで、僕の想像は完全に浮び上つたのである。

このレニンの本の中に、どういふわけか兎にかく入りこんでゐたウエルズの論文は、レニンの感慨無量の言葉を、僕の記憶に呼び返したばかりでなく、それに生きた意味を充分にもたして了つた。何故ならばウエルズの論文には、レニンの面影は殆んど爪のさき程もあらはされてゐないとしても、逆にウエルズ自身がさながらありのまゝの姿でその中に現はれてゐるからである。

先づウエルズがその中に自分自身を暴露してゐるところの彼の不平から始めよう。彼はレニンに面會するに、永い間待たなければならなかつた——とまづ考へて貰ひたい。それが彼(ウエルズ)を火の様に「怒らせて了つた」のであつた。一體レニンはウエルズに來てくれとでも云つたのか？ レニンはウエルズを應接しなければならぬ譯合ひがあつたのか？ レニンは少しでも暇をもつてゐたと云ふのか？ 事實はそれどころの騒ぎではない。當時の如き難局に際しては、彼の時間の一分一秒は、悉く用事で以て埋まつてゐたの

だ。従つてウエルズと應接する様な暇な時間を見出すことは容易な業ではなかつたに違ひない。假令外國人であらうとも、容易にその位のことには分る筈である。ところが問題はかう云ふ點から起つて了つた——と云ふのはウエルズは教養ある外國人として、そして又——彼の所謂「社會主義」の手前も憚らず——帝國主義の型に鑄固められた生え拔きの保守的な英國人として、極めて固い觀念にとりつかれてゐた。といふのは彼の訪問は、この野蠻な國とその支配者にとつては、非常な光榮とすべきであるといふ觀念にとりつかれてゐた。ウエルズの論文は巻頭から巻末まで、この不届きな誇大妄想な氣を匂はしてゐる。

レニンの性格描寫は、そんなことだらうと誰もが豫想する通りに、とんでもない見當違ひで始められてゐる。諸君！レニンは「どう考へても學者ではない」さうである。職業的の學者、ウエルズでなければ、事實この問題を誰がさうきめて了ふことが出来ようか？「彼の（レニンの）署名でモスコから現はれた短い奇怪な小冊子には、どこをみても西歐の労働者の心理状態に就いて凡べてとり違へた觀念が記されてゐるが……それはレニンの

精神の眞の性質を殆んど表白してゐない」この高名な紳士は明かにレニンが土地問題や理論經濟學や、或ひは社會學や或ひは又哲學に關する大きな根本的な著書を多數に書いてゐる事を、知つてゐない。ウエルズは唯「短い奇怪な小冊子」だけしか知らない。しかもそれでは「それ等の小冊子は、レニンの署名があるので出てゐるだけである」と彼は評して、暗に他人が書いたといふ事を諷してゐる。それならば「レニンの精神の姿」は彼が書いた幾十卷の著書の中ではなくして、大英國からのこの上もなく聰明な賓客と交へる光榮に浴すことの出来た一時間の對談の中に現はれてゐると云ふことになる。

ウエルズからは、誰でもが尠くもレニンの外面的の印象を面白く記述するだらうと云ふことを待ち付けてゐたに違ひない。そして簡單ながらも事實通りに觀察した描寫の一筆でもあるならば、我々は彼のフェビアン式の不合理を悉く許してやらうと待ちかまへてゐた。然るに、事實は全く期待を裏切つて了つた。レニンは氣持のいい、淺黒い顔をして、顔の表情が絶えず變化してゆく。そして快活な笑ひ……レニンは寫眞とはさう似てゐない。「我々との對談中、彼は少し許り身振りをする」かう云ふ様な凡庸な觀察をする點では、

ウエルズはブルジョアの新聞記者の助手位りの資格しかない。その上彼は、レニンの額はアーサー・バルフォアの長い寧ろ不釣り合いな頭を聯想させるといふ發見をしてゐる。そして「椅子の縁に腰を下すと、彼の足は床につくかつかない位である」やうな小人に、レニンは結局されて了つてゐる。

アーサー・バルフォアの頭がどうかうと云ふことに就いては、我々にはこんな偉い相手に就いては何も云ふべきものをもたない。そして我々は喜んでそれは長いといふことを認めよう。けれどもそれ以外のことに就いては、凡べて何と云ふ驚いた出鱈目だらう！レニンは赤味を帯びた白い顔をしてゐる。どんな場合でも、それが淺黒いと云へる筈はない。レニンは幾分低いかも知れないが、とにかく中背の男ではある。然し彼が「小人」といふ印象を與へたこと、そして足が殆んど床につかなかつたと云ふことは、單にウエルズだけの見方に過ぎないのだ。文明開化のガリヴァーの氣持ちで、北方の共產主義の小人島の國に渡つて來たウエルズの、單なる見方に過ぎないのだ。

尙その上にウエルズは、會話の途切れ目にレニンが手で眼を被ふ癖があると、評してゐ

る。「それは多分何か視力に缺陷があるに違ひない」この發明な學者はさう云つてゐる。我々我々も、かう云ふ身振りを知らないことはない。それが殊更に目だつのは、まだ氣心の分らない始めての人に對してゐる時であつた。手を額に楯の様な形であて、その指の間から性急に相手を見つめる。ウエルズにさう思はれてゐる間にも、レニンの視力の「缺陷」なるものが、彼がその訪問者をそんな風に見据ゑ、その訪問者の鼻もちならぬ自負、その狭量、その文明人としての驕慢、その文明人としての無智を見抜いてゐたといふのは、この上もない皮肉な話である。そして彼がかう云ふ姿をのみ込んで了つた時、彼の頭を暫らくの間ふつてそして云つた。「何といふ敵だらう！ 何といふ出來損ひの小ブルジョアだらう！」

この會見にロートシュタイン君が出席してゐた。そしてウエルズは、彼が列席したと云ふことが、「ロシアの現状の特性」を象徴するものであると云ふ發見をその序にしてゐる。ロートシュタインは外務人民委員會の命によつて、レニンの極端な明け放しの性質と風變りな無作法を補ふために、レニンの女房役としてつき添つてゐたのであつた。この一文の價の

値打もない愚かな觀察には、我々は殆んど何とも云ひ様がない。ウエルズがクレムリンに乗り込んで来た時には、彼は意識の中にブルジョアの國際知識こくさいちしきの曇りをもつて来たのだ。そして彼が豫め「タイムス」からひつぱりだしたか、又は他の世間並の焼き直しの噂談の種本から引き出した所のものを、レニンの事務室で彼の鋭い眼で——それは勿論「視力に缺陷」はなかつた——事實に發見したのである。

ところでこの對談は事實どういふ内容をもつてゐたか？ これに就ては我々はウエルズから如何にも情けない言葉をきくのである。その言葉は、他の點ではその人の正確さを我は全然信用して、位りっぱな立派な人の心にも、レニンの思想が、如何に哀れに、如何に淺ましく映えいせられるものであるかと云ふことを示してゐる。

ウエルズは「彼は一人のいゝ氣になつてゐるマルクス主義の空論家と、論争しなければならぬ様になるであらう」といふ確信に到達した。「しかしそれは事實には決して起らなかつた」我々は何もそれに就ては驚きはしなかつたとしても、レニンの精神の「本性」は三十餘年の彼の政治的並に學術的な活動の中では現はれなかつたとしても、この英國生

れの「敵」との對話の中には、これが確かに現れたといふことは、我々は先刻承知してゐる。

ウエルズは尙語を續けて云ふ。「レニンは忠告することが好きだと、私は聞いてゐる。しかし彼は私にはそんなことをしなかつた」然し乍らそんな猛烈な自意識で頭張つてゐる立派な紳士を、實際誰がどうして忠告することが出来ると思ふか？ 第一レニンが忠告好きだといふことからして事實でない。ほんとはレニンが極く教訓的に話をする仕方を心得てゐるだけのことである。それも彼の仲間の話好きが何か教はらうとしてゐると、彼が見極めた時だけに用ゐるに過ぎないものである。さういふ場合になれば彼は時間も面倒も吝まなかつた。しかし乍らどう云ふ風の吹き廻しか、小人島の事務室にまぎれ込んで来た、この猛烈なガリヴァーと面かと向つて見ると、レニンは僅か二三分間も話してゐる内に、ダンテの地獄の入口の上に刻まれてゐる「凡べての希望を擲つて！」といふ言葉に似た様な固い確信をもたされて了つたに違ひない。

對談は大都市の事に觸れた。ウエルズは最初にロシアに來た時に——彼が明かにいつた

様に——都市の外観はその商店と市場の取引工合で決定されるといふ考へをもつた。彼はこの創見をその對談の相手レニンに裾分けをした。レニンは共産主義下の都市は、その廣表に於て著しく縮少して行くだらうと、それに「云ひ加へた」ウエルズはレニンに指摘して曰く、都市の手入れは非常な大事業であるだらう。そしてピーターズブルグの大建築の多くは、唯歴史的記念物として、その意義を保つに止まる様になるであらうと云つた。レニンも亦ウエルズのこの當然過ぎる程當然な話に同意した。「彼自身の若い連中の多くが考へ及ばずにあつた所の、集産主義の不可避的な結果を理解してゐる人と話すことを、彼は喜んでゐると云ふ感じを私は得た」と、ウエルズは附加へて言つてゐる。これがウエルズを評價するに最もいふ秤である。彼は、共産主義下では現在の巨大な集中的の都市は瓦解するであらう。そして現在の資本主義的な大建築物の多くは歴史的記念物としてのみ、唯その意義をもつであらうと云ふことを、彼は創見——彼の卓越した眼識の成果であるといふ見做してゐる。どうして憐れな共産主義者が（ウエルズが名附けた様に「階級闘争のしつゝ、こゝい熱狂者」が）かくの如き創見をなすことが出来ようか！ それ許りでなく、それは古典

的なユートピアンが、之を既に知つてゐたことは暫く措くとしても、ドイツの社會民主黨の古い綱領のありふれた解説書にそれはとつくの昔に記述されてゐるのである。ウエルズがその對談中充分に聞かされた筈のレニンのあの嘲笑をなせ「特に氣付かなかつた」と云ふ理由がこれで解つたらうと僕は思ふ。レニンは顔に嘲笑の色を見せはしなかつた。彼の顎は笑とは全く異つたあるものを表はしてゐたのではないかとさへ僕は思ふ。然し彼のしなやかな器用な手は常にその度毎によく自からの役目を知つて、自分のこと許りで一杯になつてゐる彼への訪問者に、不作法な欠伸が口から出ようとするのを隠すに、必要な役目を務めた。我々が既に聞かされた様に、レニンはウエルズに忠告を與へなかつたが、それは我々が充分に理解し得る理由からであつた。それ故にウエルズはそれだけ一層力を入れてレニンに忠告を與へた。ウエルズはレニンに、社會主義を成就するだけには「生活の物質的方面許りでなく、全民衆の心理状態をも建直すことが必要」であるといふ新思想を注ぎ込んだ。彼は「ロシア人は、生れつき個人主義者であり商賣人である」といふことをレニンに指摘した。彼は共産主義は餘りに「性急に」活動してゐる。そしてそれ

が築かれる前に崩解しようとしてゐる。等々と、同じ様な意味のことをレニンに言ひ放つた。

ウエルズは云ふ「それが我々の意見が別れる主な點に即ち進化的集散主義とマルキシズムとの間の相異に我々をもつて來た」進化的集散主義の名のもとに、我々はフアビアン製の自由主義、博愛、社會立法、それによりよき將來に就て説教する日曜講演をもつてゐる。ウエルズ自身は彼の進化的集散主義の性質を次の様に組織的に説明してゐる。「凡べての社會に對しての一定の教育組織によつて現在の資本主義的組織は教化され、集散的な社會に變改され得るものである」然し乍らウエルズは事實に於て誰がその「一定の教育組織」を作り出すか、如何なる人にそれを適用すべきかは説明してゐない。英國のプロレタリアの上に反り返つた貴族か？ 或ひは全く逆に貴族の頭を踏み敷いた英國のプロレタリアか？ 否決してそれはプロレタリアではない。他の問題はとにかくとして、之ばかりはプロレタリアではない。聰明なるフアビアン協會員、惻發にして私心なき企圖をもつ人々、紳士と淑女、ウエルズ氏とスノウデン夫人、一體彼等は何のためにゐるのであるか？ 若し彼等

が彼等自身の、頭腦の中に秘め隠されたる所のものを、確實に根氣よくとり用ゐて、資本主義の社會を教化することが出来ないならば、若し彼等が大英國の××でさへも全く氣づかない程の合理的な幸福な漸進的の速度をもつて、今日の社會を集散的の社會に變改することが出来ないならば、一體彼等は何のためにゐるのであるか？

凡べてこれをウエルズが喋舌つた。そして凡べてこれをレニンが聽いてゐた。「私には」とウエルズは嬉しさうに云つた。「この並外れた小さな人と話合ふことは、ほんとにいゝ氣晴らしになつた。」

ところがレニンにとつては？——おう、長い間何んといふ嫌な思ひをしたことだらう。イリツチ——おそらく彼は二三の非常に強い寸鐵的なロシアの言葉が、彼の心から洩れ出るのを抑へるわけにはゆかなかつたであらう。彼はそれを相手に聞える様に英話には翻譯しなかつた。そしてそれは、彼の英話の單語の持ち合はせが貧弱であつたためばかりでなく、禮儀を重んずるためでもあつた。イリツチは極めて禮儀正しかつた。しかし終ひには彼もこの禮儀の沈黙にもはや屈從してゐるわけにはゆかなかつた。ウエルズは報告してゐる

る。「彼は愈々私に答へねばならなくなつた。そして今日の資本主義は度し難い程貪慾であり破壊的である。それは到底濟度し難いものであると斷言した」レニンはモネーの新著書に記載されてゐた色々の事實を引用して、資本主義は英國の國民の船渠を破壊し、炭坑の適當な利益を妨げたりその他種々の悪業を逞うしてゐるといふことを述べた。イリツチは事實と數字との言語を知つてゐた。

「彼と論争することは私にはなかく容易でなかつたことを、私は告白する」と、ウエルズは案外な結論を下してゐる。それはどういふことを意味してゐるか？之は進化的集散主義がマルキシズムの論理に降服した始まりとすることが出来るか？否、否、「凡べての希望を擲て」である。この陳述はちよつとは意外のもの、様に思はれたが、事實は決して偶然のものではなく、からくりのあるものなのだ。従つてそれはフェビアン一流の啓發的な學校先生式の匂ひをもつてゐる。それは英國の資本主義者、銀行家、貴族、そして大官連にむけて云はれたものである。ウエルズは彼等に云ふ。見よ君等の行動が甚しく不正であり破壊的であり、そして我利的であるがためにクレムリンの空想家と論議するに當つ

て進化的集散主義の原理を説得させることが、私には極めて困難であつた。それをよく考へなさい。日々充分にフェビアンを以て洗濯をし、教化をうけそして進化の道を取りなさい。と云ふのが眞の意味であつた。この言葉を以ても判る様に、ウエルズの當惑さうな告白は決して自省の始まりといふわけではなく、帝國主義戦争とヴェルサイユ條約によつて、充分に完成され、道徳化され、フェビアン化されて來た資本主義社會の教化的事業の續きであるに過ぎないのだ。

珍らしく素直な同情を以て、ウエルズは評してゐる。「レニンは彼の味方を信頼することは測り知るべからざる程である」。之には意義を挾む何物も我々はもたない。味方を信頼する念の缺けてゐるといふ様なことは、レニンには一度もなかつた。正しき者は永久に正しなくてはならぬ。この信頼があつたればこそ、何をさし措いても、彼に忍耐をもちこたへさしたのである。暗澹たる幽閉の幾月の間、假令間接的であらうとも兎にかくロシアと西歐とを結びつけることの出来る様な人ならば、何人とも對談しようといふ忍耐を與へたのである。レニンがウエルズと對談したのはさうした意味からであつた。然るにレニン

が、彼を訪問しに来る英國の労働者連と話をする時は、全く、異つた調子であつた。彼等とはレニンは直接の關係をもつてゐた。そこではレニンは教へもし教へられもした。それに反してウエルズとの會見は、半ばお勤め式の、外交的性質をもつたものであつた。この著作家は云ふ。「我々の對談は物別れに終つた」云ひ換へれば進化的集散主義とマルキシズムとの試合は、この時は引分けに終つたといふのである。ウエルズは英國に歸り、レニンはそのまゝクレムリンにあつた。ウエルズはブルジョア社會にむかつて愚かなる文章を次へ〜と書いてゐた。然るにレニンは首をふつては繰り返して云ふ。「奴は小ブルジョアだ！ あゝ、あゝ、何といふ敵だらう！」

讀者は多分、殆んど四年も経つた今日、僕が何故こんな馬鹿らしいウエルズの論文に嘯りついてゐるかを怪しむであらう。この論文がレニンの死に捧げられた本の中のひとつに優遇されてゐるといふ事實だけでは、その充分な理由にはなるまい。そして又僕が病氣靜養中慰みに書いたからといふ理由も充分な理由にはならない筈である。否、僕には他にも

つと重要な理由があるのだ。今日唯今ウエルズの一黨は、頭に進化的集散主義の幾人かの聰明なる代表者をいたゞいて英國に勢力をはつてゐる。そしてレニンに捧げられたウエルズの文章は、おそらく他の何ものよりも一層よく英國労働黨の領袖連の精神を我々に示してゐると僕は思つてゐる。そして僕がさう信ずるのは全く理由のないことではない。何れかと云へば、その中にはウエルズより一層悪いものはいくらでもある。これ等の人々がブルジョアの重い荷を擔ぎまはつたが故に、落伍して了つたといふことは、何といふ恐ろしいことであるか！ 彼等の驕慢さは英國のブルジョアジーが、歴史上に大きな役割を果したといふ誇りが、時季外れの今頃になつて、飛び出して來たものであるが、彼等が彼等以外の階級の人々の生活を汲みとることが出来ないのは全くこの驕慢によるのである。そして新しい考へ方と彼の頭の上に進行しつゝある歴史的進化の過程とを汲みとることが出来ないのも亦、之によるのである。ブルジョアジーの輿論と提携する狭量な日和見主義者、經驗論者として之等の紳士は彼等自身と彼等の偏見とを、世界の隅から隅にふりまいて行く、そして彼等自身より他のものは、何ものをも見ないで終るのである。

レニンは歐洲のあらゆる國に住んだことがある。彼は多くの外國語をよく話す。彼は外國のものを讀み研究しそして精細に之を論じる。彼は比較し歸納する。彼は一大革命國の主班に立つた時でさへ、細心の注意を以て他人の意見をきき、知識と經驗とを蒐集するにあらゆる機會を利用することを忘れなかつた。彼は悉くの世界の生活を汲みとることに倦むことはなかつた。彼はドイツ、フランス、英國の言葉を自由に話し且つ讀んだ。その上尙イタリー語をも讀んだ。仕事に忙殺されきつた彼の晩年、しかも政治部の會議中彼は、チエツク・スラヴァキヤの労働者の運動に就ての直接の氣持を知るために、チエツクの文法を彼は靜かに研究してゐた。我々は度々さういふ様な場合に彼をつかまへた。彼は幾分當惑の様子で笑つて辯解をした。彼に較べるとウエルズは、上つ面に教育された狹量なブルジョア人種を具象化してゐる。このブルジョアジイは見ることは見ても、何物も見えない人種であり、彼等の世襲的な偏見で充滿してゐることが禍して、それ以上に學ぶべき何もないと信じてゐる人種である。そしてマクドナルド氏は、この種の型のもつと一層型にはまつた暗い清教徒的な一變種であるが——ブルジョアジイの輿論を次の様な言葉で糊塗

してゐる。我々はモスコーと戰つた。そしてモスコーを征服した、と。

モスコーを征服したといふか？ さうだ。どんなに「彼等」は大きくならうとも、眞に憐むべき「小人」である。彼等は今日、この今日が既に暮れようとしてゐるにも拘らず、彼等自身の明日に就ては何も知つてゐない。自由黨と保守黨とは現在權力を握つてゐる「革命的」な社會主義者の術學者どもを譯もなく片づけて了ふ。この兩黨は彼等と妥協する。そして素知らぬ顔をして、彼等の没落、大臣としての没落、否政治的の没落の陰謀にとりかかる。同時に彼等は——聊か尋常ではないが——英國のマルキストに勢力を奪取させるやうな企てをする。然り實にそれは「階級闘争のしつつかい熱狂者」のマルキストである。英國人にとつても亦、社會革命は、マルクスが説いた通りの法則に従つて進んでゆく。

彼特有の機智を以て——しかもブディングの様に粘々した機智を以て——ウエルズはかつて自分から剪刀をとつて、マルクスといふ空論家の前髪と髻とを剪みとつて、英國式に刈り、紳士風に剪み、そしてフェビアン化さうといふ、恐ろしい企てをしたことがあつた。しかし乍らその企てから彼は何ものも得るところがなかつた。そして又幾度これを繰

り返すとも、何の得るところもないであらう。ウエルズが錆びた剃刀を以て、一時間も費して懸命に顔を剃りまはさうとも、レニンが依然としてレニンであつた様に、マルクスは依然としてマルクスであらう。そして我々は大胆に豫言することが出来る。遠からざる將來に於て、ロンドンの街頭に、例へばトラファルガル辻に、二つの銅像が相並んで立つであらう。それはカール・マルクスであり、ウラディミール・イリツチ・レニンその人であるのだ。英國のプロレタリアは彼の子供たちに云ふであらう。「労働黨の小人どもが、これ等の二巨人の髪と髯とを剃り落さなかつたのは、何といふ仕合せなことだつたらう」

かゝる日の来るべきを豫想しながら——それを見るためにこそ、僕は生きながらへようと努めてゐる——僕はちらと眼を閉ぢる。するとウエルズが彼と會見した時の、その椅子にレニンの姿が生けるが如くに眼に浮ぶ。そしてその會見の翌日か或ひはその當日であつたか、腹の底からの呻きにつれて、「小ブルジョアだ！ 敵だ！」と叫ぶ彼の言葉を、僕はあり／＼と耳にするのだ。

II レニンと國民主義

レニンのインターナショナルナリズムは今更こゝにもち出す迄の事もない。インターナショナルナリズムの著しい汚點は、世界大戰の初期に第二インターナショナルナリズムの中にみなぎつてゐた、かのインターナショナルナリズムの改悪問題のために融和し難い割目が出来たことである。議會の演壇から現はれて來た官許「社會主義」指導者連は、舊式の世界主義の精神から出た抽象的議論を以て、祖國の福利と人類の福利とを調和させた。労働者をして貪婪なる祖國の支持に當らしめる様になつたのは、實際に於いて彼等がなした業であることは周知の事實である。

レニンのインターナショナルナリズムは、言葉の上での國民主義とインターナショナルナリズムとの融和の一形式ではなく、國際的革命行動の一形式である。所謂文明人の住む地球上の領土は、民族と民族とが、階級と階級とが、互に絶大な戦を交へつゝある永劫不變の戰場である。此の世界で苟も重要な問題であるならば、それを一國家の圈内に押し込めて置く

事の出来る問題は一つもない。見える糸と見えない糸とは、此の問題を世界のあらゆる隅隅の幾多の現象と結びつける。インターナショナルの任務と力とを理解した所のレニンは國家的偏見にとらはれない點に於いて、殆んどあらゆる人にも遙かに優れてゐた。

マルクスは世界を満足なものであるべきだと断定したのは、哲學者であると云ふ意見をもつてゐた。そして世界をその通りに變革することを、彼の任務と信じてゐた。然し乍らこの天才の豫言者はその實現を見ずして此の世を去つた。然るに今舊世界の變革は十分にその翼を張つて進行してゐる。そしてその最初の仕事師こそレニンであるのだ。彼のインターナショナルリズムは、歴史上の諸事件の實際上の解釋である。そして國際的範圍に國際的目的にその事件が進行する。その進行への實際上の順應である。ロシアとその運命とは此の大きな歴史的闘争、即ちその成果の上に人間の運命がかゝつてゐる所の、この大きな歴史的闘争の中の單なる一分子に過ぎないのである。

レニンのインターナショナルリズムは今更こゝに持ち出す迄の事もないが、同時にレニン自身は最大級に國民主義的である。彼は新らしいロシアの歴史に深く根を下ろしてゐる。

そしてそれを自分のものにし、それを最も深遠に表明し、そしてそれによつて國際的の行動と國際的影響の最高位に達してゐるのである。

レニンの性格を「國民主義的」として描寫する事は、意表外の事と思はれるに違ひない。然しこれをよく根本的に考へて見るならば、それは當然のことである事が判る。今ロシアに行はれてゐる様な革命を、人類の歴史に何等の先例をもたずに指導する事が出来るためには、民衆の生活の主要な力と密接な有機的關係、即ち最も深い根柢から出てゐる所の關係をもつ事が最も明かに必要である。

レニンはそれ自身にロシアのプロレタリアを體現してゐる。ロシアのプロレタリア、それは政治的には恐らくレニン自身と殆んど同じ年輩のうら若い階級、同時に深く國民主義的な階級、ロシアの過去の發達の全部はそれと密接な關係をもち、そしてその中にロシアの全將來は横たはり、その上にそれと共にロシアの國民は生きもし死にもする國民主義的な階級である。常規と先例の缺けてゐる事虚偽と因習の缺けてゐる事、それに思想の確固な事、そして行動の大膽な事は——理解の缺けてゐる處には決して起る筈のないその大膽

さ——ロシアのプロレタリアの特性を表はすものであり、同時にレニンの特性を表はすものである。

ロシアのプロレタリアを國際的革命の中で、最も重要な勢力として了つた所のものは、彼等プロレタリアの本来の性格であるが、この性質はロシア國民歴史の過程、世界で最も專制的な國家の野蠻極まる残酷さ、特權階級の無爲無能、交換利益の飽くなき搾取の成果である資本主義の氣違ひじみたる發達、ロシアのブルジョアジーと彼等のイデオロギーの墮落、彼等の政策の低下と云ふ様な種々なものによつて、以前から培はれ用意された所のものである。我々の「第三階級」は改造も知らず大革命も知らなかつた。そして又それ等を知る事も出来なかつた。そのために、プロレタリアの革命の問題は寧ろ廣い性質をもつ様になつた。我々は過去の歴史上に、ルーテルもトーマス・ミュンツエルも、或は又ミラボーもダントンもロベスピエールももつてゐない。もつてゐなければこそロシアのプロレタリアは彼等のレニンをもつてゐるのだ。傳統に缺けてゐる所のものは、革命的精力で立派に償はれてゐる。

レニンはロシアの勞働者階級を彼自身に反映してゐる。そしてそれはその政治上の現在に就ただけでなく、その田舎者としての極めて最近の過去に就ても又さうである。どこから見てもプロレタリアの指導者である此の人間は、唯外見が一農民に似てゐる許りでなく、一個の農民である事を強く匂はせる所のあるものを備へてゐる。スモルニーに相對して、世界プロレタリアの尙一人の英雄の像が立つてゐる。臺の上に立つたマルクスは黒いフロックコートを着込んでゐる。我々は些細なる衣服の如何を論じようとするものではないが、とにかくレニンが黒いフロックコートを着てゐる形を想像する事は、我々には全く不可能だ。ある繪には又マルクスが緩宏なシャツを着た姿に描かれてゐる。そしてそのシャツの前に片眼鏡がぶらさがつてゐる。

マルクスが洒落氣などのなかつた人間であつた事は、マルクス主義の精神を幾分でも理解してゐるもの、凡べてにとつて明かな所である。然し乍らマルクスは、それはドイツの勞働階級の指導者連の例に洩れず、我々と異つた國民教養の根柢の上に成人した。そして我々と異つた空氣の中に生きてゐた。そして又その根を延ばしてゐる所は農村ではなく協

同組合ギルドであり、中世紀の複雑な都會文化であつた。

マルクスの筆觸は、華かで美しい。そしてその中に強さと粘り、怒りと皮肉、粗雑と雅趣とが混つてゐる。その筆觸は又宗教改革、乃至はそれ以前の一切の過去のドイツの社會主義的文學的文學的な、そして倫理學的な層面を匂はしてゐる。之に反してレニンの文筆や演説の上の風格は極めて單純であり禁慾的である。そしてそれは彼の全體としての性質そのまゝの姿である。然し此の強烈な禁慾主義には、道德的な説教の匂は全くない。それは彼の主義ではない。又考へ抜いた揚句の方式でもない。そして又疑ひもなく氣取りでもない。それは唯單に働きかけようとする力の内面的集注が外側に現はれた迄のものに過ぎない。それは非常に大きな型の約やかな百姓風な實體である。

眞のマルクスは「共產黨宣言」(Communist Manifest)の中に、經濟學批判(Critique)の序文の中に、そしてかの「資本論」(Capital)の中に含まれてゐる。假令彼が第一インターナショナルの創立者でなかつたとするも、彼は矢張りそのまゝの彼である事には變りはなかつたに違ひない。之に反してレニンは直ちに革命行動に發展してゐる。彼の學者としての事

業は唯實際行動への準備であるに過ぎない。假令彼が過去に於て一冊の本も著はさなかつたとしても、今日の彼である處のもの、云ひかへればプロレタリア革命の指導者、第三インターナショナルの創立者としての彼は、矢張りそのまゝの姿を歴史の上に現はしたであらう。

レニンに渡された此の種の證書を否認し得るためには、云ひかへればロシアの從來の制度を打壊しうるためには、明晰な學者的な考へ方——唯物辯證法——が必要であつた。然しそれは必要ではあるがそれだけでは充分ではない。尙こゝに我々が直觀と呼ぶ所の神秘的な創造的の能力が必要であつた。即ち直ちにそして正しく物の情勢を把握する才能、必要なもの重要なものを不必要なもの、無意味なもの、内から識別する才能、繪の描かれてない部分を想察する才能、他の思想特に敵の思想をよく考察する才能、凡べて之等を以て綜合された全體を整へる才能、そしてそれに對する「方策」が胸に浮んだ刹那を逸せず打撃を與へる才能、これ等の才能が凡べて必要とされるのだ。これは行動へ向はうとする直觀である。そしてそれは一方から云へば、我々が透徹力と呼ぶものと一致する。

レニンが左の眼を閉ぢ乍らラヂオを耳に當て、帝國主義歴史の指導者の議會演説、或はきまり切つた外交上の覺書、あの血に飢ゑた陰險さと政治的辭令の凝を聞く時の姿は、瞞されるものかと云ふ氣構への、如何にも自負心の強いロシアの小作人そつくりの形である。そしてそれは學者的の氣持ちで最新知識をつめ込んである殆んど天才に近い最も強烈な百姓の伶俐さである。

若いロシアのプロレタリアは、かつては農民の硬い芝土をその底まで鋤きかへした人間として出来る範圍のものならば、何事をもなし遂げる事が出来るのだ。我々の國民的過去の全體がこの事實を育て上げたのである。然し乍らプロレタリアは自然の成行によつて權力を得たために、我々の革命は突然にそして急激に國民的な偏狹さ、地方的な引込思案を克服する事が出来たのだ。サヴィエート・ロシアは共產主義インターナショナルの避難所になつた許りでなく、その綱領と實踐の生ける實體になつたのである。

科學によつて未だ開拓されてゐない、知られざる道を通つて——その道によつて人間の個性は形を變へるのであるが——人類の歴史の中で最も偉大な革命行動に必要とするもの

の一切をレニンは國民主義からとり出した。久しきに亘つて理論的には、國際的に云はれもし書かれもして來た所の社會革命が、先づ第一番にレニンによつて、その國家的に體現されたと云ふ事實だから云つても、彼は——言葉の眞の意味に於て——世界プロレタリアの革命的指導者になつたのであつた。

Ⅲ 演壇に於けるレニン

十月革命がすむと、寫眞師や映畫製作者がレニンをつかまへた事は、一度や二度ではなかつた。レニンの聲は蓄音器のレコードに吹き込まれた。レニンの演説は筆記されて印刷に附された。かくして、ヴラデー・イリツチの凡べての要素は、今日迄も残されてゐる。然し乍ら、それ等は結局離れ々の要素である。彼の生きた個性なるものは、他人の企て及ばないとして休む事なく動的なこれ等の要素の結合の内にあるのである。

僕は眼を拭ひ耳を新にして、演壇に於けるレニンを、心をすまして視且つ聽かうとする時に——始めの頃僕はよくさうしたものであつたが——僕は先づ強い中にも柔かみを見せ

た中背の姿を見る。そして、何れかと云へば、響く聲、そして殆んど立て続けにしかも初めは、別に力も入れてない、滑かな、口早な淀みのない聲を、僕は聞く。初めの間の言葉は、いつも大抵ありきたりのものに止まる。調子は音締めを合す程度のものに過ぎない。姿勢は全體としてまだ整つてはゐない。そして、ジェスチャーも充分ではない。視線は下に向けられ、顔は曇つてゐる。寧ろ怒つてゐるのではないかとさへ思はせる。今彼の心は次第に聴衆に接近しようとしてゐるのだ。この序曲は聴衆と演者の氣分次第で長くもなり短くもなる。然し俄然、彼は問題の核心に飛び込んで行く。主題は初めてこゝに明らかになる。演者は上半身を前に曲め、中指をチョッキの縁に差し込む。この二つの動作の結果、頭と手とは際立つて前に飛び出して来る。頭そのものは小柄な頑丈な、恰好のいゝ均齊の取れた身體に比べて決して大き過ぎるとは思はれない。反つて彼の眉宇と禿げて彎曲した前額とが力をさへ表現してゐる。彼の腕は、生き／＼と動く。然しそれには誇張もなく神経質な處もない。手は大きく指は短く「平民」の手であり、頑丈である。そして全體の姿から受ける確信と男性的な善人性との印象を、我々は此の手からも受ける事

が出来来る。それは演者が敵の計略を看破して氣色ばんだ時とか、或は敵を巧にわなにかけた時とかに最もよくこれを見る事が出来る。かうなるとレニンの眼は、くぼんだ眼窩の奥から強い視線を放射してくる。一九一九年にとつたあの見事な寫眞に極めてよく表はされてゐる眼が即ちそれである。どんなに冷淡な聴衆でさへも、此の視線に出會ひ、そして次に來るべき言葉を待ちもうける刹那には、戦慄を覺えないではゐられないであらう。この様に強烈に精神が緊張した瞬間には、彼の顎骨は灼熱し、融けるかとさへ思はれる。人はその裏に人事や關係や情勢に就ての鋭い知識の潜在してゐる事を知る。顔の下部は赤褐色の髯と共に殆んど蔭になつてゐる。聲は今迄の硬さを失ひ、しなやかさと柔かみをもち屢屢巧なあてこすり様の調子を持つて來る。

然しこゝまで來ると演者は敵が考へつきさうな抗議をもち出して來る。さもなくば、故意に敵の論文を惡意に引用して來る。彼はそれに攻撃的の意見を述べ、前に、先づその反對論が根柢のない、上走つた、まやかし物である事を明かにする。彼は指をチョッキからはづして、身體をおもむろに後へそらす。そして前に場を作つて攻撃の身構へをするかの

様に、二三歩後へ退く、そして半ば皮肉に半ば絶望的な様子を装つて彼の頑丈な肩をゆすぶる。そして指を一杯に開いて彼の両手を張る。その時の反對者と、論題とに應じて、反對者の糺弾と嘲笑と混亂とが、常に彼の論駁ろんぱくに先立つのが普通である。聴衆は云はゞ彼が如何なる論證を言ひ出すか、彼の心の氣持が如何なる調子を取るだらうかと云ふ事を、彼が言出す前から知つてゐる。さう云ふ状態になつてゐる處に、初めて彼の論理的な攻撃が初まるのだ。左手は又更めてチョッキか、それよりもズボンのポケットに突込まれる。右手は論法の動くにつれて振り廻はされる。そしてそれに韻律を與へる。又必要となると、左手はいつでも飛び出して來て右手を援ける。演者は聴衆の方に身體を凭れかゝる氣味で演壇の端の方に出て行く。そして、身體を前にかゞめ、彼自身の卒のない言葉を、巧に調子を變へて吐き出して行く。既にこの時には、彼は中心の思想しきう、全演説の主要な中心點に這入つて了つてゐるのだ。

もし聴衆の中に反對者がゐるとすれば、批評的な敵意のある彌次がしつきり聞くなしに飛んでくる。然し十中の九迄は彼はそれに答へようとしなない。演者は自から必要と見做し

た事だけを話す。必要と思はれる人だけに話す。そして自から必要と見做すが故にそれを話す。彼は時ならぬ反駁じやまに邪魔される事を好まない。その折々に氣轉きまのきいた應酬をする。と云ふ事は、彼の精神を集中しようと云ふ努力と兩立するものではない。敵意のある彌次が飛んだとなると彼の聲は益々硬さを増してくる。彼の言葉は一層充實し印象的になる。彼の思想はより鋭く、彼のジュエスチュアジュエスチュアはより粗あらくなる。彼が敵意のある彌次を相手にするのは、唯それが彼の思想の大體の方向に一致した時に、そしてその御蔭で必要な結論に一層早く到達する様な場合だけに限つてゐる。然しその時には彼の答は恐ろしく單純たんじゆんなものである點で、全く意外なものである事が多い。彼はそれを隠すだらうと敵が豫期してゐる事情を彼は遠慮なくありのまゝに曝け出す。革命の初期に民主々義が毀損された。それに對して糺弾しなければならぬと、メンシエヴィキがやつきとなつて問題とした時に、彼等は一再ならずこの種の苦い逆襲ぎやくしゆの經驗をなめさせられてゐる。

「我々の新聞は發行停止を喰つてゐるぞ！」「無論である。然し遺憾乍らまだ全部に互つてゐない。直ちに徹底的にそれ等を停止して了はう（嵐の様な喝采）プロレタリア獨裁制

は、言はゞブルジョアの鴉片を賣るに等しい此の恥づべき行爲を、完全に掃蕩して了うであらう」(再び嵐の様な喝采)

演者はこゝで口を噤む。両手をポケットの中に入れてゐる。そこにはわざとらしい姿勢は全くない。彼の聲には技巧的な抑揚はない。全體の姿、唇を固く結んだ顔、頬骨、そして僅かに嗚がれた聲音、これ等は彼の正義と眞實とに對する牢固たる信念を表現してゐる。「もし、諸君が罷業をしようとするならばよろしい。我々は充分警戒をしよう」

この演者が自からの同志で敵でないものを攻撃する時には、何人もそれを彼の態度と調子の内に看取する事が出来る。その演説が假令最も猛烈な攻撃であつたとしても、大體に於いて、相手を「説得させる」と云ふだけに止まつてゐる。屢々演者の聲は急に高い調子になる事がある。それは、彼が夢中になつて彼の同志の一人を説き伏せ、その意見を覆し、そしてその誤謬の原因がその反對説の考慮の不充分であるためであり、その上その反對論の根據はとるに足らないものである事を、論證する時に見る調子がそれである。かうした論駁をしてゐる間に、彼の聲は時によると金切聲かなきりこゑに抜けて消えて了ふ事がある。そのため

に最も激越な攻撃的演説でさへも、その間に一脈の人のよさを漂はす事がある。

この演者は傳へようとする思想の全體の筋を最後まで、最後の實質的の結論を得る迄考へ抜く。然しそれは單に筋だけに止まるもので、表現法や修辭法には少しも考慮を費さない。然しそれはある特別に簡潔な適切な力強い表現をしようとする時、或はその後、黨や國の政治的活動に「自由に通用する小錢」になる様な標語を作らうとする場合だけは例外である。一つの句の上に尙一つの句をつける。或は逆にして他の句と結ぶと云ふ様な言葉遣ひは、元來言葉としてしなやかなものではない。かう云ふ構造の言葉は速記者にも、そして又後になつて編輯者にも大きな迷惑となる。然し此等のぎごちない句によつて初めて熱烈な力強い思想が表現されるのだ。

然しこの演者は事實、廣い教養のあるマルキスト、行政に就いての理論家、そして偉大なる學識をもつ學者であるとは思はないか？ それは少なくともある瞬間には、世にも珍らしい獨立獨歩の人が演説してゐるかの様には見えないか？ 自分自身の思索によつて此等の結論に到達した處の人、自分自身の頭腦を以て、自分自身の様式に、科學的の配置もな

く、科學的の述語學によらずして、凡べてそれを初めて創造した所の人、そして今それを自分自身の様式に表はす所の人、かくの如き人が演説をしてゐるかの様には見えないか？それは何のためであるか？——と云ふならば、それはこの演者が彼自身のため許りなく、民衆のために考慮を巡らし、彼が問題を最初取上げた時に彼自身用ゐた凡べての理論上の手段に、彼の叙述が禍せられない様に、彼の思想を、民衆の経験の中で瀟しすまして來たからである。

然し乍ら屢々此の演者は彼の思想の梯子を餘りに急いで上つて行く。そして一度に二三段を跳ね上る。どう云ふ場合にさうであるかと云へば、結論が非常に明らかにそして實際に直ぐ手近にあると彼に思はれる時、そして聴衆に一刻も早く結論を知らしてやりたいと思ふ時がそれである。然も彼は同時に聴衆との連鎖が斷ち切れた——と云ふ事を見抜くことがある。さうなると彼は直ちに自身を引締める。そして今迄上りつめた所から一思ひに飛び下りる。そして更めて、しかも靜かな遙かに穩かな歩みで又上り初める。彼の聲さへも又變はる。彼の聲は凡べての表面的な巧みを捨て、唯信念の命ずるまゝの力をもつ。

さうなると自然彼の演説の構造がこの後へと飛び下りた急轉のためにその所を得ないで迷ふ事になる。然し乍ら演説はその構造のために存在するものであるか？一體演説の中には、聴衆を奮起させようする論法以外に大切な論法が他に何かあるか？

そしてこの演者が二度目に彼の結論に達した時に、そして例外なく彼の聴衆を引附けて了つた時に、何人も此のホールの中に聴衆が一齊に考へ込む様になる所から生じる感謝に充ちた喜びを看取する事が出来る。そこで最後に残つてゐる事は、それがしつかりと聴衆の胸に刻まれる様に、二三度その結論を強説する事である。そしてそれがもつと容易に記憶に印せられる様に、それに單純な明瞭な生けるが如き言葉を與へる事である。そこまで行つて了ふならば、演者も聴衆も一先づはつと息をついてもいい。そして笑談を云つてもいい。そして又笑つてもいい。そしてこの悠つくりした間に聴衆全體が考へ込むならば、その新らしい獲物を尙よく受容れる事が出来るのである。

レニンのユーモアは彼の他のたくらみの様に——たくらみと云ふのも當らないが——單純であつた。レニンの演説の中には氣のきいた事を言つたり、さては洒落などを云つて自

分で得意になる様な所はない。然し民衆に解り易い、そして言葉の眞の意味で一般向きの生き／＼した笑談はない事はない。もし政治上の事局が左程緊張してゐないならば、そして聴衆の大多数が「彼の同志」であるならば、彼は笑談を云はないものでもない。聴衆は老獮乍らも初心な、機智に富んだ言葉を人の好い無遠慮な特性として喜こんで受容れる。と云ふ譯は、こゝではそれが單に美しい言葉の問題だけではなく、その裏に凡べてが一つの同じ目標に役立たうとするものがひそんでゐる様に見えるからである。

この演者が笑談を云ふ時には、顔の下半分が一層甚しく飛び出して来る。殊に口が特別に餘計飛び出して来る。その口は、人を誘ふ様に笑ふ事が出来る。彼の額と頭との線は柔かになる。射る様な眼なざしはもう消えて、唯愉快さうに眼は光る。彼の嶮しい心の緊張は幸福と友愛とによつて柔げられてゐる。

レニンの演説の中の基調をなす處のものは、彼の全事業でもさうである様に、目的へ向つて直線的に進むと云ふ彼の態度にある。彼は彼の演説を作り上げるのではなく、しつかりした實のある結論に到達する様に演説を導いて行くのだ。彼は色々な道から聴衆に近附い

て行く。彼は説明する、説き伏せる、驚かす、笑談を云ふ。又更めて説き伏せる。そして又更めて説明する。彼の演説をまとめてゐるものは形式的の巧みではなく、聴衆の意識を刺の様に突きさす處の今日のために作られた明確なる目標である。彼のユーモアも又それを元として出て来たものである。彼が笑はせる様な事を云ふのもその手段である。強烈な警句もその實利的の意義をもつてゐる。ある時は煽てある時は引締める。それから次に昔から此の國の共通語になつてゐる所の寸鐵的の言葉が口をついて現はれる。然し演説者がこの様な警句を用ゐる前に、彼は丁度い、機會を見出すためにある曲線を描く。そしてそれを見出した時に、彼はそこに釘をあてがつて、眼でよくそれを測り、金槌で力まかせに釘の頭を下と打つ。打つては打ち、打つて打つて打ち抜く。そして遂に釘がしつかりとめり込む迄打ち込む。それからレニンは更めて機智に富んだ言葉を以つて左右からその釘を打つ。そしてその釘を緩める。そして終に彼はそれを抜き取つて、その釘に親み馴れてゐた凡べての人々の名残惜しさうな顔に眼もくれず、記録と云ふ古鐵箱の中にそれを投げ込むで了ふ。

そして今演説は終りに近づく、個々の論點が擁立され結論は確實に引出された。演者は仕事を終へた労働者の様に疲れた顔を見せてゐる。絶えず彼は禿げた頭を手で撫で上げる。玉の汗がぼた／＼と垂れる。彼の聲は今や篝火が消え絶えたかの様に沈みきつて了つた。彼は正に終りに近づかうとしてゐる。然し乍ら演説者なるものは何人もその演説の最後を飾るために浮き立つ様な終曲を奏でようとする。そしてそれを奏でないで演壇を去る事は明らかに忍び難い事なのだ。然しそれは何人も結局は空しく匙を投げる所であらう。然し乍らレニンだけにはそれが出来る。と云つて彼は辭を美しくして結末を結ぶと云ふ意味ではない。彼は終りに臨んで論旨をまとめる。「もしも我々が之を了解するならば、もしも我々が實行するならば、我々は確に勝利を得るであらう」と云ふ言葉は彼のよく用ゐる結句である。或は「何人も言葉に於てなく、行爲に於てそれに向つて努力しなければならぬ」或は又屢もつと簡単に「私が諸君に云はうとする處はそれだけである」と云ふに止める。そして此の結句は、レニンの雄辯の本質、そしてレニン自身の本質に全然ふさはしい此の結句は、決して聴衆の熱を冷ますものではない。それ所でなく反つて、この聞き映え

のしない「地味な」此の結句によつて、聴衆は宛然意識が急に閃めいたかの様に、レニンがその演説の中で彼等に傳へた凡べてを更めて又理解する。そして聴衆は感謝に満ちた熱狂的の喝采を嵐の様に浴びせかける。

然しレニンは既に書類をまとめて、ためらへば必ず襲ひかゝつてくるものを逃れるために、急いで演壇を下りる。頭を肩にすばめて、顎を沈め、眼は深く眉毛の中に隠れ、彼の粗い口髯は心痛のために皺のよつた上唇の上に不機嫌に逆立つてゐる。割れる様な拍手が起る。そして、次へ次へと打ち寄せる大濤の音、「ばんざー——いー！ レニン！ 指導者！ イリツチ！」この世にも稀な偉人の頭が電燈の光の輝く中に際立つてゐる。狂はん許りの大濤が、十重二十重にその周りに打寄せてゐる。そして今嵐がその絶頂に上つたと思はれる時に、この混亂と喧騒と拍手とを貫いて、宛然嵐の中の號笛の様に不意に張ちきれる様な燃える許りのうら若い聲が響き渡つた。「イリツチ、萬歳！」そして協同と愛と熱心との最も深い底の底からどつと起る一齊の叫び！「萬歳！ レニン！ 萬歳！」かくて喚乎の聲は部屋一杯に割れる許りに鳴り響くのだ。

III 傷けるレニン

「同志！」兄弟の様な親みをもつこの挨拶、僕はこれを、今日の如き容易ならぬ危機に際して、我々が兄弟として互ひにそして我々のサヴィエート組織と一層結合を強固にする必要を、そして我々の××主義の旗幟の下に團結して立つ必要を、我々の凡べてが感じてゐると云ふ事實を表白してゐる言葉であると、僕は説明する。我々の旗手が——尙一層適切な言葉で云ふならば——プロレタリアの國際的旗手が病床にあつて、恐るべき死の悪魔と戦ひつゝあるこの憂ふべき時に際しては、我々は勝利を得た刹那よりも、寧ろ互ひに一層親密であるのである。

レニンが襲はれたと云ふ通知を、僕はカザン戦線のスキヤシユクにゐた他の多くの同志と共に受取つた。それは我々にとつて打倒れんばかりの猛烈な打撃であつた。右からの打撃、左からの打撃、頭の上に振りかゝつた打撃であつた。然しこの新しい打撃は、卑怯にも後から襲ひかゝつた不意打であつた。それは裏切者が不意に展開した新しい戦線であつ

た。今日の場合この新しい戦線程我々を驚かし、我々を苦めたものはなかつた。なせならば、それはウラデーミル・イリツチの生命が死と戦ふ戦線であつたからだ。どんな戦線でどんな酷い敗北を想像して見た處で——然し僕はこの方面の勝利が目前に迫つてゐる事を確信する。そして諸君も又さうであらう——我々の指導者の胸板を、貫いてゐる戦線での敗北の致命的結果程、ロシアと全世界との労働階級にとつて、これ程重大な、それ程悲痛なものは一つとしてあり得ない筈である。

何人でも少しく考へて見さへするならば、此の人物が労働階級の凡べての敵から今迄に一身に引受け、そして將來にも受ける所の濃厚な憎しみを理解することが出来る。なせならば自然が革命的の思想と労働階級の不撓の精力とを一つの形に創造してみた時に、それが非常な傑作であつたからである。そしてこの形こそウラデーミル・イリツチ・レニンその人であつたのだ。労働者の指導者の——革命の戦士の——展覽會には非常に多くの非常に多様な出品が陳列されてゐる。そして革命の事業に三十年を過した多くの他の同志の様、僕は色々の國で色々の型の労働者の指導者、労働階級の革命の代表者に會つた。然

し乍ら同志レニンなるものに於て、我々は初めて我々の血と鐵との時代に創造された一つの姿を得たのである。

我々の背後には、所謂平和に満ちたブルジョア社會の爛熟らんじゅくの時代が横はつてゐる。そこには矛盾むじゆんが上へ上へと積み重なつてゐた。この時代には歐羅巴が所謂武装した平和の時季を過して來た。そして血は殆ど植民地だけに流されてゐた。そしてそこでは貪婪な資本が進化の遅れた人種を粉々に打碎いた。そして歐羅巴は所謂資本主義的軍國主義の平和を享樂した。此の時季に歐羅巴の勞働運動らうどううんどうの最も著明な指導者連が生れたのである。これ等の間に偉大なる個人アウグスト・ベーベルの光輝ある姿を我々は見る。彼は勞働階級の漸進的な遅い進展の時代を反映してゐた。勇氣と鐵の如き精力を以て、凡べての運動に最も細心の注意を以て、土臺を現實に踏み試たかして、時を待ち準備をすると云ふ戰略せんりやくは、彼に特有のものであつた。彼は分子の集合が徐々に行はれて遂に一體をなす様に、勞働階級の勢力を漸進的に増大しようとして云ふやり口を反映してゐた——彼の思想は次第々々に前進して行つた。それは宛もドイツの勞働階級が國際的反動の時期に當つて、打撃から徐々に立ち上

り、暗黒と偏見とから逃れ出たと全く同じ形態であつた。彼の精神上の姿は成長し進化し益々強く益々大きくなつて行つた。然し乍らそれ等は凡べて、依然として時を待ち準備をすると云ふ基礎きその上を放れはしなかつた。かくしてアウグスト・ベーベルはその思想と手段とに於いては、既に過去に屬した前時代の最も優れた人物じんぶつであつた。

我々の時代は、それとは別の材料で織られてゐる布である。この時代——そこには今迄蓄積された矛盾が恐るべき爆發はくはつをした。そしてそれがブルジョア社會の假面かめんをすた／＼に引裂いた。そして國際的資本主義の一切の基礎が民衆の恐るべき虐殺によつて根柢から粉碎された。それは一切の階級反目を表に曝さらけ出し、そして單なる利益のために幾百萬の生命を破壊はくわいする恐ろしい現實を、人々の前に曝け出した時代である。そして此の時代には西歐の歴史は眞の指導者を生れさすことを忘れてゐた。無視してゐた。そして生れさせ損ひもしたのであつた——そしてそれは又無理もない事でもあつた。なせならば大戦の間際まで歐洲の勞働者の最大の信頼を享樂きやうらくしてゐた所の凡べての指導者連は、昨日を反映してゐるとはしても、決して今日を反映してはゐなかつたからである。

新しき時代、恐るべき動亂と血みどろの戦の時代が初まるに従つて、前時代の指導者の力では如何ともする事が出来なくなつて來た。我々の恐るべき偉大なる時代を、全部そのまゝ反映する所の一人の人間、その人間をロシアに於て一度で鑄固めて了つたと云ふことは、歴史が兩手を擴げて待ちもうけてゐた所であつた——そしてそれは決して偶然の事ではない。僕はこゝに再び云ふ。それは決して偶然の事ではない。一八四七年は思想の王國の凡べての思想家の内の最大偉人、マルクスの姿を退步せるドイツに創り出した。そしてその人が新しき歴史への道を指示したのであつた。當時ドイツは退嬰的の國であつた。然し乍らドイツのインテリゲンツアは、革命の進展を仕遂げなければならぬ。そしてインテリゲンツアの全知識を左右する最も重要な代表者はブルジョアの社會と斷絶して、革命的プロレタリアの味方となり、労働階級發展の理論として、労働運動の綱領を編み出さなければならぬと云ふ事を、歴史はドイツに對して希望したのであつた。

マルクスが當時豫言した所のものを、實現すべく我々の時代は要求されてゐる。然しここに又我々の時代はこの新時代の大精神を雙肩に擔ふべき新しき指導者を要求してゐる。

そしてこの我々の時代の大精神こそは、労働階級をその階級の歴史的事業としての最高の地位に攀ち上らした所のものである。そして人類が生存を續けて行きたいならば、そして歴史の廣い大道の上に腐肉の様に倒れ朽ちたくないならば、是非通過しなければならぬ國境を明確に見抜いてゐる新しき指導者を、我々の時代は要求してゐるのである。此の時代の間、ロシアの歴史は、一人の新しき指導者を創造した。昔の革命的インテリゲンツアのもつ正しき一切のもの、彼等の犠牲的精神、勇氣、壓迫への反抗精神、これ等が凡べてこの人間の中に凝り硬まつたのであつた。然し乍ら此の人間は若い時代には、インテリゲンツアが、ブルジョアと聯絡してゐるとの理由で、インテリゲンツアの世界と頑強に絶縁してゐたのであつた。そして労働階級の發展の思想と實體とを、自からの中に體現したのであつた。若きロシアの革命的プロレタリアの上にたより乍ら、此の人間は労働者の國際的運動に就ての豊富な經驗を利用した。そしてその思想を挺子の理によつて實際行動に變へたのであつた。そしてそれからその巨大な翼を一杯に擴げて政治的水平線上に飛び上つたのであつた。然らばそれは何人であつたか？ 我々の革命時代の最大偉人、レニンその人

であつたのである。

同志よ、労働者の運命は單に一人の人物によつて左右されるものでない事は、我も知り又人も知る所である。然し乍らそれは我々の運動と労働階級の發展との歴史の上に、個人力なるものが左程重要なものではないと言ふ意味に解釋してはならない。一人の人間が労働階級をその人自身の型や形に新しく鑄直すと云ふ事は不可能であらう。そして自からの意志によつて、プロレタリアに對して勝手に發展の道をあれやこれやと指し示す事は出來ない相談である。然し乍ら人は労働者の仕事の遂行を援ける事は出来る。そして彼等をその最後の目標に一層速に導く事は出来る。批評家連は、カール・マルクスが革命は普通考へてゐるよりも遙かに近い將來に起るであらうと豫言した事を指摘してゐる。彼等がその批評家に、マルクスが高い山に立つてゐたればこそ、距離が割合に近く見えたのであると答へたのは、極めて正鵠を得たと云はねばならない。

多くの人はウラデイーミル・イリツチを非難した。そしてそれは一再に止まらなかつた——そして僕もその内の一人であつた——と云ふのは、彼が多く左程重要でない原因や偶

然的な情勢に氣を留めなかつたからなのだ。これは「普通の」遅々として進展して行く時代の政治的の指導者としては、一の缺點であつたに相違なからう。然し乍ら反つてこれが新時代の指導者としての、同志レニンの最大の特徴となつたのだ。附録的な外部的なそして二次的な重要さをもつものは悉く度外視される。そして唯基礎的な執拗な階級間の敵意だけが、ブルジョア戦争の恐るべき形に於て残される。革命的な視線を將來に投げかける事、そして本質的なもの、基本的なものを把握すること——それが最大級にレニンに恵まれた特異の天稟であつた。ウラデイーミル・イリツチの事業を前後を通じて残らず觀察することの出來た人で——この時季に僕が恵まれた様に——凡べての外部的な偶發的な表面的なものを振り棄て、主要な大道と實行方法とに眼を附けて行く鋭い透徹した智力、此の偉大なる天稟に百パーセント讚嘆し——私は敢て繰り返す——百パーセント讚嘆しないものが果してあつたであらうか？ 労働者は進み行くべき道を指示してくれる之等の指導者を尊重すべき事を知つて、假令プロレタリア自身の僻目が一時的に指導者を阻む時でさへも、眞直に唯それの示す道の跡を追つてゆく。この天賦の力強い智力と

共に又ウラデイーミル・イリツチは、不撓不屈の意志を恵まれてゐた。これ等の特性が寄り重なつて、大膽な冷靜な心と堅い撓まざる意志とからなる眞の革命の指導者を生むたのである。

我々がレニンの事に就て、云ひ聞き且つ讀む所の凡べてが死亡報告式のものでなくしてすんだ事は、どんなにか幸な事であつたらう。しかもそれはもう一步を進めるならば、危く最大の不幸に際會する所であつたのだ。我々はこのクレムリンと云ふ手近な戦線で結局生命が勝利を得て、ウラデイーミル・イリツチは、間もなく吾々の間に歸り來るべき事を信じて疑はないのだ。

同志よ、彼の勇敢なる心と革命の精神との中に、彼は労働階級をその身に具象してゐると今僕は云つた。そして今はロシアの労働階級がチエツク・スラヴァツクスや白衛軍や英佛の金で買はれた兵隊と、遠い戦線で全力を盡して戦ひつゝある恐るべき受難の時期である。この時に當つて我々の指導者が、その白衛軍やチエツク・スラヴァツクスや英佛の傭兵の廻し者から受けた負傷と今現に戦ひつゝあると云ふ事は、それはとりも直さず歴史の

内部的の象徴であり、殆んど意識的の企圖であると云ふ事が出来る。こゝに内部的關係と深い歴史的の象徴とがあるのだ。そして特にチエツク・スラヴァツクスやアングロサクソンや白衛軍などとの戦闘に於て、一日は一日毎に一時間は一時間毎に、我々の強さは増しつゝある事を、我々の凡べてが確信してゐる様に——僕は戦場からたつた今歸つて來た當局者の一人として、敢て僕はさう云はう——さうだ。我々は強さを増しつゝある。今日の我々よりも明日の我々は、一層強いものであるに相違ない。そして明日の我々よりも明後日の我々は一層強いものであるに違ひない様に——カザン、シムビルスク、サマラ、ウーファ、その他一時占領された都市が、我々のサヴェイエートの民族の手に還りつゝあると、僕が云ふことの出来る日の近き事を僕は少しも疑はない——同時に我々は又、同志レニンの回癒の日の近きにある事をも堅く信じて疑はないものなのだ。

然し乍ら彼の姿は、一時戦線から退いてゐる。此の傷ける指導者の人の胸に喰ひ入る様な姿は、我々の前に今尙はつきりと立つ。一瞬の間でも彼は我々の間から離れるものでない事を我々は知つてゐる。彼が銃丸の暗撃に會つて、横たはつてゐる時でさへも、彼は我

我の凡べてを勵まし、我々を促し、そして我々を前へ／＼と驅り立てたのであつた。此の卑怯な不意撃の飛報ひほうを手にした時、苟も我々の同志、我々の正直な労働者にして手を拱こまぬいて徒らに茫然となす所を知らなかつた様なものは一人もなかつた。彼等のあるものは等しく拳を握り、銃を手にした。そして彼等の多くはプロレタリアの敵に對し、完膚なき迄の復讐を口々に誓つたのであつた。戦線に於ける階級意識かいきふいしきに燃え立つ戦士達が、身體の内に二つの銃弾を宿しつゝ、レニンが病床に横たはりつゝある事を知つた時に、如何許りの憤激に震えたかは、此處に僕が更めて云ふ必要はない。何人とてもレニンの性格に金屬の如き強きあるものゝある事を否いなむ事は出来ない。然し乍ら今は最早彼の精神に金屬を失つてゐる許りでなく、彼の肉體にも又之を失つてゐるのだ。だがそれによつて彼は今ロシアの労働階級に一層親しみを増してゐる。

我々の言葉と心臓の鼓動こどうとが、レニンの病める床に届くかどうかは、僕は知らない。然し乍ら、彼がそれを悉く感じてゐる事は僕の疑ひ得ざる所である。彼が發熱はつねつした事を聞いてさへ、我々の心臓が二倍にも三倍にも増して震へ打つ事を彼が知つてゐると云ふ事は、

之又僕の斷じて疑はない處である。我々は、一つの同じ××主義サヴィエートの家族の一員であることを、今日我々の凡べては此の時に當つて、以前にも増して、一層明かに認識する。我々の時代のこの最も偉大なる人間が死の危機きまに瀕してゐる時程、我々各自の生命が如何にも安價あんかに思はれた事は未だかつてない。銃弾を以てレニンの頭を粉砕ふんさいする事は、一介の愚人でさへ尙よくなし得る處である。然し乍ら再び新しく此の頭を造り出す事は、自然それ自身にとつて極めて困難なる問題であるであらう。

否、彼は再び起き上るであらう。そして我々と相共に考へ、働き、戦ふであらう。その代りに我々は、苟も精神的な力が我々に残つてゐる限りは、そして我々の心臓が濫かに打ちつづける限りは、我々は××主義の旗のもとに永久に忠誠ちゅうせいである事を、我々の愛する指導者に誓ふ。我々は血の最後の一滴迄も、我々の最後の氣息の根のとまる迄も、労働階級の敵たるものと戦ふのだ。

V 病めるレニン

同志よ、此の年に我が黨は思想の透徹さと意志の強固さとに就てある試練の座に置かれたのであつた。その試練は尋常のものではなかつた。なせならば凡べての我が黨員と最も廣汎な範圍の労働人口との意識を——一層正確に云ふならば、我々の國と全世界の殆んど凡べての國との労働者の全部を、著しくも悩ます所の一つの事實によつて、我々は試練されたからである。と云ふそれは決して他でもない、我がウラデーミル・イリツチの病氣を云ふのである。三月の初旬彼の病狀が悪變して來た時に、中央委員會の政治部は、同志レニンの病狀に就て、黨員と國民とにどう云ふ風に報告しなければならぬかと、云ふ事を考究するために會合した。我々が此の最初の重大な必らず世界を愕かさすには措かない處の病狀報告を、黨員と國民とに與へなければならぬ破目になつた時に、この政治部の會合がどんな氣持を以て開かれたかは、同志よ、諸君の何人もが想像する事が出來ると僕は信じる。當然の事として我々は、この時にも亦政治家である事を忘れなかつた。然しその

ために我々は別に非難さるべき筈はないと僕は思ふ。なせならば我々は同志レニンの病狀を考へるだけではすまなかつたからである——無論我々とても彼の脈搏、彼の心臓、彼の熱の容體を事々に心配する事に於ては敢て人後に落ちるものではないが——その外に我々は彼の心臓の鼓動の數が、労働者と黨との政治的脈搏に、如何なる影響をもつかを考慮しなければならなかつた。黨の強さを懸念して、しかも又それに深い信頼を置く事を忘れずに、我々は愈々危篤と云ふ事が明かになつた時でなければ、黨と國とに通報してはならぬと我々は云つた。我々の敵は早速活動を開始して、民衆特に農民の人心攪亂、不安な流言に、この病狀報告を利用するに相違ない。そのことは何人も疑ふ事の出來ない確定の事實だ。然し同時に又我々は各黨員の責任を増す事になると云ふ事實から考へて、その病狀の進行を即刻黨に告げなければならぬと云ふ事も、之又何人と一瞬も疑ふ事の出來ない事實である。五十萬人を抱擁する偉大なる我が黨は、偉大なる經驗を有する偉大なる團體である。然し乍らこの五十萬人の人間の間に立つて彼レニンは、他の企及し得ない地位を占めてゐる。過去の歴史は、自國の運命の上には勿論、人類の運命の上に迄も、かほど迄の影

響を與へた人間を未だかつて一人も知らなかつた。そしてレニンの歴史的偉大さを測るべき特種の物指しをもつてゐなかつた。それがために、彼が長い間仕事から離れたと云ふ事實、そして又彼の容態が險惡であると云ふ事實は、深甚な政治上の驚愕を引き起すに相違なかつた。

労働階級が凡べてを征服する事は、無論、々々、々々、我々は明かに知つてゐる。我々は歌ふ。「我々を救ふものは上に立つ人ではない」——そして又「護民官でもない」この聲は正しい。然し乍らそれは過去の歴史的意味に於て初めて正しいのだ。云ひかへれば、マルクスもウリアーノフ・レニンも生まれなかつたとしても、労働者は結局は凡べてを征服するであらうと云ふ限りの意味に於て、初めてそれは正しいのだ。労働者は彼等自身で、彼等の必要とする思想と方法とを完成したであらう。然し乍らそれは今よりも一層に遅々たるものであつた事は確かである。労働階級が彼等の流の兩側の土手に、マルクスとレニンの如き二つの人物を築き上げたと云ふ時の巡り合はせは、革命にとつて大きな幸福である。マルクスは法則の表をもつた豫言者である。レニンは遺言狀の執行者である。彼はマ

ルクスのした様にプロレタリア獨裁政治を教へ馴らした許りでなく、最も困難の事情の下にその法則の執行に階級と民衆とを教へ馴らした。そして實際に活動し、謀を巡らし、そして凡べてを征服した人間である。我々は今年は一部分レニンなくして實際の仕事に従はねばならなかつた。思想上の根本義に關して我々はい先き頃迄、彼からヒントと指圖とを得て來たのであつた。例へば長年の間續くだらう様な農民の問題、國家の構成、それに國民性の問題等に就てのヒントや指圖を受けたのであつた。

そして今我々は、彼の病狀が悪變して來た事を愈々發表しなければならなくなつた。我はこの公表によつて、中立的の民衆や農民や赤衛軍が結局どんな考へを起すかを氣づかつたのは寧ろ當然であつた。なせならばレニンを信頼する點に於ては、農民は國家構成分子として第一に位するものである。他のものに對してはとにかくとして、イリツチは労働者と農民とに對しては、國家構成分子にとつての一大黒柱であつた。農民はレニンが實務から長く遠ざかつてゐる間に、彼の政策が變更しはしないかと云ふ氣づかひをもちはないであらうか——それが我々の間の多くの者の心痛の種であつた。黨と労働者の大衆と

そして全國とがどう云ふ變化を起すであらうか？ 一般を震撼させた最初の容態書が現れた時には、黨は全體として結束し、延び、そして精神的に以前より高いレベルに攀ち上つた。同志よ、無論、黨は活きた元氣な人間から成立つてゐる。そしてその人々には缺點もあり弱點もある。共產主義者の間にさへもドイツ人の云ふ様に、「人間的な、甚だしく餘りに人間的な」ものが多大に存在してゐる。そこには黨派としての争、個人としての争がある。そして又由々しき争もあれば根もない争もある。そしてそれは將來も又常にさうであるに違ひない。なせならば、大黨派である以上、かくの如き苦しみに悩まされずすむものは、この世の中にはないからである。然し乍ら黨の精神上の強さ、政治的の比重は、かくの如き悲痛な經驗に苦しみつゝある間に擡頭する所のものによつて決定される。即ちその一方の例としては、結束心、紀律などがそれである。そして他方の例としては、淺薄なもの、個人的なもの、人間的なもの、甚だしく人間的なものなどがそれである。さて同志よ、我々は絶對的の確信を以て、我々の結論を引出す事が出来ると思ふ。即ちそれは我々がレニンの指導を長い間離れなければならぬと黨が知つた時に、黨は堅く結束した。

そして黨の考へ方の透徹さ、黨の意志の統一、そして黨の戰鬥能力等を脅かすもの、悉くをたゞき倒した——と云ふ事である。

ハルコフに向つて旅立つ前に僕は、諸君が知つてゐる様に、黨の古い同志である我々のモスコフ指揮官ニコラス・イヴァノキツチ・ムラロフと話しを交したが、その時に僕は、赤衛軍はレニンの病氣に關聯して時局をどう見るであらうかを聞いて見た。するとムラロフは云つた。「初めはその知らせは雷でも落ちたかの様に鋭敏に響くだらう。彼等は仰向けに打倒れて了ふだらう。そしてそれからレニンに就てもつと深く考へるだらう」正しくその通りである。同志よ、くすんだ赤色の赤衛軍は、今彼等一流の考へ方で、歴史に於ける一個性の役目に就て深く考へる様になつた。そして我々古い時代の人々が小學校の子供の時に、學生の時に、或は若い労働者の時分に、本の中で學んだもの、牢獄や流刑中に考へ論議した所のもの、即ち「英雄」が「民衆」に對する關係、主格的要素と目的格的事情との關係、等々に就いて彼等は今よく篤と考へてゐる。そして今、一九二三年に十萬の頭數をもつ吾々の若い赤衛軍は具體的にこの問題を考へてゐる。そしてそれと共に凡べてのロシ

ア人、凡べてのウクライナ人、そして一億の頭数をもつその他のあらゆる種族の農民達は、歴史上のレニンなる人間の役割を充分によく考へてゐる。

我々の政治的機關、即ち委員や各部の書記長は之にどう云ふ答をするか？ 彼等の答辯はかうである。レニンは天才であつた。天才は一世紀に一度生れるだけである。そして世界の歴史は労働階級の指導者として唯二人の天才を知つてゐる。マルクスとレニン、これこそその二人である。天才は最も強い最も訓練された黨の法文によつてさへも造り出す事は出来ない。然し黨は天才を見付け出す事の不可能な間は、黨の集会的の努力を倍加する事によつて、出来るだけ天才を償はうと努める事が出来る。それが我々の黨の機關がくすんだ色の赤衛軍に通俗的な形で示す處の、個人と階級との關係に就ての理論である。そしてこの理論は正しい。丁度今レニンは働きを止めてゐる。そこで我々は兄弟として二倍に働かなければならない。二倍の注意を以て危険を監視しなければならぬ。二倍の精力を奮つて危険から革命を守らなければならぬ——と云ふ理論はまさしく正しい筈である。そして我々は中央委員會の委員からくすんだ色の赤衛軍に至る迄、我々の悉くはかくの如

くに努めよう。

同志よ、我々の仕事は、假令それが大きな計畫の下に遂行される時でさへも、誠にあき易いつまらないものである。我々の仕事の方法は平凡である。記帳、計算、生産物の課税そして穀物の輸出——之等の仕事を我々は一步一步、一段一段と果して行く。然し果してそこには黨が無價値なものに墮落して行かうとする危険はないだらうか？ そして我々がかくの如き墮落を許す事が出来ないのは、行動の統一を僅かでも侵害する事を、我々が許し得ないと少しも變りはない。なせならば、今日の如き時季が相當に永く續くとしても、結局それは永久に續く事があり得ないからである。恐らくそれはさう永くはないであらう。大きな範圍の革命的爆發が、丁度歐羅巴の革命の初期の様に、我々の多くが考へてゐるより比較的近き將來に起るであらう。もしレニンの無数の政略上の教訓から、我々が何か一つ特にはつきりと記憶したいとするならば、それは彼が「大變化の政策」と呼ぶ所のものであらしめたい。今日は防塞にそして明日は第三回國會の議席に、今日は世界革命へ國際的の十月革命への奮起に、そして明日はブレスト・リトヴスクの屈辱的な條約に調印

するためのキユイルマンとウエルニンの談判！ 時局は變轉した。少なくとも我々はさう信じた。西へ進軍するかと思へば又「ワルシヨウへ」向ふ。時局が我々の方法を變化すべく強ひたのだ。諸君の誰もが知つてゐる様に、我々はリガの平和條約に調印しなければならなかつた。そしてこれとても又屈辱的な條約であつた。そしてそれから又再びこつこつと働く、一段一段と積み重ねて行く、節約、職員節減、緊縮が我々の仕事になる。電話係は三人必要であるか五人必要であるか？ 三人で事が足りるならば五人を使ふな、五人を使ふとすれば、農民はそれだけ餘計の穀物をその費用のために、手放さなければならぬ。我々の仕事は端仕事を蟻の匍ふ様に運んで行くのかも知れない。然し見よ、あのルールを、革命の焔は舞ひ上つたではないか。それでも我々は今墮落したと云はれるか？

否！ 同志よ、決してさうではない。我々は墮落しつゝあるのではない。我々は我々の方法、働く仕事を變へるだけの事である——然し黨自身の存在の根本理由である革命的本能は我々にとつて最高のものである。我々は簿記を研究する。それと同時に我々は西へ東へ鋭い眼を配る。そしてどんな事件が起らうとも我々は少しも驚かない。プロレタリアの

基礎を自から洗ひ淨め、擴大して行く事によつて我々の強さは成長して行く。我々は農民と小ブルジョアとに對し妥協をしよう。我々はネツプマンの云ふ事を聞かう。然し乍ら我々はネツプマンや小ブルジョアを黨に入れる事は許すまい。否、我々は硫酸と白熱化した鐵とを以て、黨から焼き出さう。そして第十二回の大會に於て——それはウラデイーミル・イリツチの出席してゐない十月革命以後の最初の會議になるであらう。そして黨の創立以來大會に彼の姿を見ない事は、めつたになかつたのである——我々はお互に云はう。我々は我々の胸の中に主要な命令をとがった鉛筆を以て、書きつけなければならぬ。刻み附けて置かなければならぬ。そして急激な變化の術を考究し、隊伍を破る事なく策略を巡らし、一時の同志とも永續的の同志とも提携して行かねばならぬ。然し乍ら、我々は彼等を黨に入れる事を許さない。かう我々は互に云ひ交はさう。諸君は今日の諸君そのまゝであれ、世界革命の前衛であれ！ そして嵐の叫びが西の空から響き渡つて來た時に、そしてそれが反響するだらうと思はれた時に、その時に我々が如何なるもの——記帳、計算、ネツプ——に苦しみあえいでゐようとも、我々は躊躇もなく、反響の様に答へよう。我々

は徹頭徹尾革命黨員である。我々の過去もさうであつた。我々の今日も依然としてさうである。そして又我々は永久に革命黨員である事に變りはないであらう。

Ⅶ 逝けるレニン

レニンは逝つた。我々はレニンを失つた。動脈の活動を操つてゐた神祕な自然の手は、彼の生命を斷つた。狂氣きやうきの如くに希つたもの、幾億の人間の心臓が追ひ求めたものをかなへるに、醫藥は哀れにも無力であつたのだ。

レニン！ 他を以て代へ得ざる無雙むさうの人イリツチ、もしこの偉大なる統卒とうそつ者の動脈活動を戻し蘇がへらすために、我々の血が幾分でも役立つと云ふならば、自からの血を喜んで最後の一滴迄も捧げようと思はないものが、一人としてあつたであらうか？ 然し乍ら科學が無力である所には、どんな神祕も降り掛つてはこなかつた。さうして今は既にレニンはあの世に去つたのだ。海底深く崩れ落ちる巨大なる岩礁がんせうの様に、レニンは逝つたと云ふこの言葉は、我々の意識の上に落ちかゝつたのだ。噫それは夢であつてはくれないのか？

我々は我々の眼を疑ひ、我々の心を疑ふのだ。

全世界の労働者は此の事實を夢ではないかと怪んでゐる。なせならば敵は未だに仲々に強い。行くべき道は遠い。そして偉大なる事業、有史以來の最も偉大なる事業は完成されずに残つてゐるからである。なせならば世界の労働階級らうどうかいきふにとつて、世界の歴史の上で恐らく今迄誰一人として必要ひつたなものもなかつたにも拘らず、このレニン一人だけは彼等にとつてかくべからざるものであつたからである。

二度目の病氣の襲來は、最初のものより遙かに重いものであつた。そしてそれは十ヶ月以上も持續した。醫師の傷いたましい言ひ方を藉りて云へば、動脈は絶えず生命を「弄んで」ゐた。レニンにとつてはそれは恐るべき「生命の弄び」であつた。然しそれはよくなるもの、殆ど完全に回復するものと期待出来ないものではなかつた。然し又こゝに激變げきへんが突發したのであつた。我々は皆回癒を豫期してゐた。然しこゝに激變げきへんが起つたのであつた。脳の運動中樞が働を止め、巨大なる天才のその精神活動の中樞ちゆうすうの息の根を止めて了つたのである。

そして今ウラデイーミル・イリツチは逝いた。黨は孤子となつた。労働者階級は孤子となつた。我々の教師であり、指導者であるもの、計を知らされた刹那に、湧き起つた我々の氣持こそこれであつた。

我々はこれからどうして進むで行けばいゝか？ どんな道を辿つて行けばいゝか？ どうすれば迷はずに行けるであらうか？ 同志よ！ レニンはもう我々の側にはゐないのだ。

レニンは逝いた。だがレーニニズムは亡びない。レニンの中の死せざるもの、彼の主義、彼の事業、彼的手段、彼の軌範、は我々の中に生きてゐる。彼の築いた黨の中に生きてゐる。そして彼が首領であり導いた所の世界最初の労働者の國家の中に生きてゐる。

我々は今唯々悲しみに掻きくれる。なせならば我々の凡べては歴史の偉大なる好意の御蔭でレニンと同じ時代に生れ、彼と共に働き、そして彼から學んだからである。我々の黨は事實に於てレーニニズムである。我々の黨は労働者の指導團體である。我々の一人一人にレニンの小さな一部分が生きてゐる。そしてそれが各々の中の最も貴い部分である。

我々は今後を如何にして繼承して行けばいゝであらうか？ 唯我々の手に高くレーニニズムの燈を掲げよう。我々は如何なる道を進めばいゝであらうか？ 唯黨の心を集め意志を纏めて進むならば、自からその道を見出すであらう。

明日も明後日も、一週間の後も、一月の後も、我々は問ふだらう。レニンはほんとに死んだのか？ なせならば彼の死は、我々にとつてあるべきでない。そしてあり得ない恐るべき自然の氣紛れとのみ永く永く思はれるであらうから。

レニンは逝いたと思ふ度毎に常に、我々は悲痛の氣持を味はうがいゝ。そしてそれが我々の心臓を刺すがいゝ。諸君の責任は増した。諸君を訓練した指導者の名を辱めるな、この聲は我々の誰にとつても、戒めであり、警告であり、訴へであれ。

哀愁と悲嘆と困憊の中に我々は我々の足並を揃へ心を併し、我々は新しき戦のために、尙も相倚つて團結しよう。同志よ！ 兄弟よ！ レニンはもう我々の傍にゐないのだ。さらば、イリツチよ！ さらば指導者よ！



昭和六年四月三日印刷
昭和六年四月五日發行

トロツキ一原著

レニンの横顔

定價金一圓二十錢

翻譯者 小池 四郎

發行者 和田 利彦
東京市日本橋區通三丁目八

印刷者 林 晴夫
東京市日本橋區通三丁目八

印刷所 日東印刷株式會社

發行所 春陽堂

東京市日本橋區通三丁目八
電話日本橋 五六五
振替東京 一六七八
一七八

春陽堂新刊書目録

安部磯雄著 次 の 時 代 價 四六判極美箱入 一、五〇税一二

川崎健二譯 資本論を如何に讀むべきか 價 四六判洋布裝箱入 二、五〇税一八
世にマルクス資本論の解説多々あり、されど本書は其最中斷然たる名著である。マルクスに入らんとするには先づ本書一巻を用意されたい。

直井武夫譯 ヘーゲル辯證法批判 價 四六判特布裝箱入 二、〇〇税一二
ヘーゲル辯證法の完全な批判的認識なしにマルクス主義の根源的把握はできない。本書は唯物辯證法に關してなされた諸見解中屹然卓越せるもの。

奈良正路著 産業組合法の新研究 價 菊判、紙裝カバ付 二、八〇税一八
法律の本質、信用組合、販賣組合、利用組合、設立方法、組合員の權利義務、管理、加入、退會、解散、清算、倒閉等産業組合に關する全面的體系的指導解説書。

木村禧八郎著 金本位制の没落 價 四六判クロース裝 一、六〇税一二
資本主義經濟の世界的没落、その世界恐慌の問題は深刻に貨幣制度特に金本位に關する。本書は金融事情に詳しき著者の權威ある解説書。

南波禮吉著 日本買占史 價 四六判極美カバ付 一、五〇税一二
買占の語彙種類目的手段より説き及んで取引所取引風の概況株式買占史商品買占史其他歐米の代表的買占を讀物風に興味深く叙述したるもの。

勝田貞次著 財界診斷の方法 價 四六判極美カバ付 一、五〇税一二
現代經濟の財界に對しては科學的な診斷を是非とも必要とする。著者は斯界の最新權威、財界金融事情の各部面にわたり明確懇切な説明を加ふ。

三浦弘一著 株式相場變動論 價 四六判極美カバ付 一、五〇税一二
株式相場は經濟金融の尖端必須知識。實價投資機材材料相場變動の變動型天井型景氣の變動型等凡そ株式相場變動に必要なる一切を解説す。

佐々木良雄著 商店經營の活路 價 四六判洋布裝箱入 二、二〇税一六
商店は成功の彼岸を指して怒濤湧く財界の大洋を航する汽船である。その最も信頼すべき水先案内たる本書なくしては沈没は餘りに當然である。

内田誠 共著 實際廣告の拵へ方と仕方 價 四六判極美本箱入 一、八〇税一八
新聞廣告の平易にして専門的な解説を初め凡そ廣告と名のつくあらゆる方面にわたつてその拵へ方並に仕方を述べた今日の寶典。

岩村 忍譯 金融信用論 價 四六判紙裝 一、〇〇税一二
ダグラス經濟學はマルクス經濟學と共に現代の最大新興理論。讀め！而して現資本主義の理論と實際の缺陷と没落と轉向を確實に把握せよ。

岩村 忍譯 ダグラス・セオリー 價 四六判紙裝 一、〇〇税一二
本書はダグラスの小論文十一篇を収む殊にその中二篇は原文にても未發表のもの。特に原著者が譯者に願稿のまま直送せるもの。

清水乙雄譯 エコノミック・デモクラシー 價 四六判紙裝 一、〇〇税一二
本書は資本主義社會の破綻を露し借用集中の問題を全面的に取拵へるダグラスの最重要理論。本書こそ新社會のための聖書である。

勝田貞次著 新平價論の誤謬と財界の推移 價 菊判 一、〇〇税一二
世界恐慌。大不景氣繼來。金融財界の打開、轉換は全く此の科學的景氣研究の指針に絕對的信頼を懸く權威ある景氣パンフレット第一編を見よ。

勝田貞次著 財界は何處へ行く？ 價 菊判 一、〇〇税一二
從來行はれなかつた不景氣の制約條件に就ての研究を始めとして日本財界全般にわたる著者の得意とする財界觀測の文獻最良指導書。

勝田貞次著 一五年投資家の取るべき態度 價 菊判 一、〇〇税一二
購買力減少の原因、不景氣の原因より説き及んで本年度財界の機構觀測、放資の時機方法を論じた投資家の必携書として榮冠を得られよ。

春陽堂刊行全集總覽

明治大正文學全集 全六拾卷	日本戲曲全集 全參拾貳卷	頭註國譯本草綱目 全拾五卷	非水百花譜 全貳拾輯	小山内薫全集 全八卷	工業大辭典 全拾卷	産業合理化全集 全貳拾卷	株式相場全集 全拾四卷	ダグラス派經濟學全集
四六判洋布美裝 普製一、〇〇〇 豫約金一、〇〇〇 特製一箱 送料一、五〇〇	四六判洋布美裝 一箱 送料一、〇〇〇	菊判極美洋布裝 五、五〇〇 豫約金五、五〇〇	四六判木版刷多 六、五〇〇 豫約金一、二〇〇	四六判布裝極美麗 本箱一箱 送料三、八〇〇 豫約金三、〇〇〇	四六判洋布裝背革金箔押箱入 五、〇〇〇 豫約金五、〇〇〇	菊判洋布裝銀色美麗カバ 一、八〇〇 豫約金無	四六判洋布裝最新美麗カバ 一、五〇〇 豫約金非ら	四六判特紙 一、〇〇〇 豫約金非ら
二入	二入	三六入	二入	一八入	三六入	一八入	二入	二入

TORITSU SHOBO

都立書房

東京・目黒 東京都立大学隣
TEL (717)2971・5224

